

---

# 十六夜の月

銀花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

十六夜の月

### 【Nコード】

N5933Z

### 【作者名】

銀花

### 【あらすじ】

関ヶ原の戦から二年が過ぎた。

両親がなく、育ての親も死に、ぶらぶら一人旅をしていた空は、偶然出会った侍の良明よしあきと行動を共にすることとなった。

良明も幼い頃から慕っていた人を戦で亡くし、国元を離れ一人旅をしていたという。

苦い記憶を背負ったまま二人は侍の故郷、江戸へ向かう。

和風ファンタジー、長編。

自サイト「梅金魚」からの転載になります。  
続きはゆっくり書いていきます。

## 序 空と海

わたしは、ふこうなんかじゃない。

だってここまでいきてこられたから。

だから、それ以上のことは望まないつもりだった。

雇用の薪を両腕に抱え、そらは夕日を見つめた。真つ赤な夕焼けはそらの顔も赤く染めた。

今日は一人で薪拾いに出かけた。今はその帰りである。そらの住まいは裏店で、それでも苦しい生活をしているわけではない。一緒に住んでいる若い夫婦がいるのだが、彼らはそらの両親ではなかった。二人には子がなく、あるところから引き取ったのだと聞かされている。

気さくで優しい二人に、そらも素直に甘えることができていた。本当の親のように慕っていた。七つのこの年まで育ててくれた彼らに、いつか必ず恩返しが出来たらと幼いながら密かに思っている。

そらは夕日を見上げながら笑みを浮かべた。柔らかい風が、そらの黒漆色の髪を揺らす。いつもと変わらない、初秋の夕暮れだった。

そらは裏店の木門を押し開け、自分の家へ駆け足で近付いて行った。

「ただいまあ」

勢い良く開いた戸の向こうの光景に、そらは凍り付き、目を見開いた。薪が全て腕から落ちる。出迎えてくれるであろうと思っていた人たちは、今変わり果てた姿で床に転がっていた。

「…………え…………」

立ちすくんだまま混乱する頭を抱えるしか出来なかった。何が起きているのか全く分からない。広がる血の色と、立ち込める血の臭いに眩暈がした。

そらが口を押さえて俯いた時、何かの動く音が聞こえた。顔を上げると一人が呻き声を上げている。そらは草履も履いたまま部屋に這い上がり、急いで彼女に近付いた。

「お峰さん！」

「…………そら…………無事だったのね」

血まみれの身体を動かさず峰は仰向けになった。彼女の血の気のない唇は安堵したように微笑んでいた。

「なんで…………どうして」

そらは涙を浮かべて峰の顔を見つめた。

少し離れた場所に倒れている峰の旦那はピクリともしない。既に

事切れているようだった。彼の手には今までそらが見たこともなかった刀が握られていて、それが静かな死闘を物語った。峰は優しく微笑みそらの頬を撫でた。

白い肌に、血の筋が引かれる。

「……あなたはまだ知らなくて良いのよ……大きくなったら……」  
きつと、分かるから。

そう言つて、峰は目を閉じた。ゴトと峰の腕が床に落ちる。

そらは呆然と彼女の顔を見つめていた。

「遅かったか……」

開け放たれたままの戸の外から急に男の声がして、そらは振り返った。そこに髪の毛の長い、長身の男が一人立っていた。

彼は床の亡骸を見て、そこに座り込んでいるそらに視線を向けた。そして苦笑を浮かべ、後ろ手で戸を閉めた。

「大きくなつたな……いくつだ？」

少し目元がきつかったが、男の声は思っていたより優しくかった。

そらは質問には答えずに、無言で彼を見上げていた。彼の存在がどこか懐かしく、初めて会った訳ではないような気がした。

そう感じた瞬間、そらの目から涙が零れ始めた。

訳が分からなかった。

突然、一人ぼっちになってしまった。

男は部屋に上がり、そらに近寄った。

「悪かったな……俺がもう少し」

早く来ていれば、そう言いかけた時そらの身体がグラリと傾いた。男は咄嗟に手を伸ばして彼女の小さな身体を受け止めた。腕に中の少女を見下ろし、男は短く息を吐いた。

「気を失ったか……無理もない」

そらの身体を抱き上げ血の海から離れたところに横たえた。

「さて……どうするかな」

二つの遺体を見下ろし、男は一人言ちた。

\* \* \* \* \*

暗闇の中で何かの気配を感じ、政長は目を覚ました。機嫌悪そうに重い瞼を開くと、そこにそらの姿があった。彼女は頬杖をついて政長の髪をサラサラといじっている。

そらを連れて行動を始めてから一月が過ぎていた。

政長は盛大にため息を吐いた。

「勝手に出てくるのは構わないが、俺を起こすな。何刻だと思ってる」

「外に出ていくなど言ったのは、あなただわ」

そう言って、そらは不満そうに頬を膨らませる。

彼女は容姿に似合わず、落ち着いた大人の声をしていた。雰囲気も、どこか大人の女性を思わせた。

それに良く見れば、彼女は青白い光をまとっている。真夜中の部屋の中は明かり一つないのに、そらは表情までもがはっきりと見えるのだ。

政長は頭を掻き、寝返りを打ってそらに背中を向けた。

「その身体がそらの物だからだ。一人で遊んでろ、うみ」

「うみ？」

「お前の呼び名だ。そらの反対で、うみ」

面倒臭そうに説明する政長の顔を青い瞳で覗き込み、うみは微笑んだ。

「わたしに名前を付けるなんて、不思議な人」

「……お前、誰なんだ」

うみに目も向けずに、政長は尋ねた。うみはにっこりと意味深に笑い、首を傾げた。



「さあ？」

それだけ言って、うみは消えた。

チラと振り返り、静かに寝息を立てているそらを確認して、政長はもう一度ため息を吐いた。

序 空と海 終わり

一、遠い記憶 (1)

温かい日差しの中で、風が桜の花びらを舞い上げた。至る所にある桜の木は満開を通り越して、少しずつ葉が息吹を上げ始めている。頭上は気持ち良いくらいの快晴で、浅葱色がどこまでも広がり、その中を薄い雲が流れていく。浅葱と桜の彩りは目に優しく写り、また立ち止まって見惚れてしまう程に鮮やかだった。

その晴天の下の細道を、景色に似つかわしくない数人の男達が騒々しい足音と共に走ってきた。

「あんのクソガキ！ どこ行きやがった！」

桜の木の下で立ち止まった彼らの一人が苛々と舌打ちをする。

「そのクソガキに金すられてる辺り、俺らマヌケだよなー」

他の一人が呑気に笑うと、先程の男がそいつを殴った。

「てめえが一番間抜けだ！ おい、まだそう遠くには行ってねえはずだ！ 絶対に見付ける！ 殺してでも奪い返せ！」

男が怒鳴ると、全員が走り出した。殴られた男も渋々、文句垂れながら走り出す。

彼らの様子を、近くの高い木の上から見下ろす者がいた。

ひよこ顔を出して通りを見下ろすその者は、無造作に切られた黒漆色の髪に、子供のようなかなり小柄な体格だ。名前をそら、と言った。

見ただけでは大概気付いてもらえないが、これでも今年で十六である。

(捕まっただけでたまるかっつ。せつかく手に入れた金、誰が返すか)

バーカ、とそらは小声で呟いた。そして、自分が今置かれている状況に大きいため息を吐く。

追われる勢いでこの木に登ったは良いものの、降り方が分からない。大分高い所まで登ってしまったようで、下の道がかなり遠く思えた。

(どうすっかな……)

唸って考え込んだ時、再び下から足音がしてそらは咄嗟に身を屈めた。

(何だよ、あいつらもう戻ってきたのか?)

そつと身を乗り出して道に目をやると、そこに一人の男が通りかかった。編笠を被っていて顔は分からないが、腰に刀を差しているのが見える。

先程の男達ではないと分かり、そらはホッと胸を撫で下ろした。

「おーい！ そのお侍さん！」

木の上から大声で呼びかけると、彼は足を止めて辺りを見渡し始めた。

「こっち、上だ！ 悪いけど、助けてくれない？」

侍が被っている編笠を後ろに傾けてこちらを見上げ、そらはニコニコと手を振った。

「降りれなくなってさー！ 頼むよ！」

侍は木の上のそらを見つめたまま不機嫌そうに顔をしかめた。そして何も言動せず歩き出す。

「ちよつと待てえーっ！」

彼の行動には怒鳴らずにいらなかった。

「何だ何だ！ か弱い少女が助けを求めてるんだぞ！？ それを無視するのか！ お前はそんなやつなのか！」

そらは腕をブンブン振り回し、大声で喚き散らした。これだから侍は嫌いだと心底思った。

去りかけた侍は面倒臭そうに戻ってきて、また顔を上げた。

「か弱い？ どこが。ただのガキにしか見えねえな」

「んだとーっ！ 喧嘩売ってんのか！」と叫んだ時だった。

メキメキという嫌な音がした次の瞬間には、そらの乗っていた枝が激しい音と共に折れた。

「ふえっ！？」

枝もろともそらは真っ逆さまに落ちていく。

この木がどれだけの高さだったかとか、死んだら金盗んだ意味ね

えとか、色んな思考が一気に頭を駆け巡った。

全身への衝撃を覚悟して身体を丸めたが、落ちた先は柔らかかった。近くで折れた枝の落ちる重い音がした。

そらが混乱したまま硬直していると、不意にチリンと鈴の小さい音がして、キツク閉じていた瞼を開いた。

そこにはさつきまで自分が怒鳴っていた侍の顔があった。受け止めてくれたようで、そらの身体は侍の腕に抱えられていた。

「……思ったより軽いな」

彼の第一声はそれだった。

「お前、この木が桜だって分かってて登ったのか？ 桜は折れやすいんだぞ」

呆れた口調で彼が言ったため、そらは少々ムカツ腹が立った。

「うるせえ、勢いで登っただけだ！ 下ろせ！」

「おーおー、それが助けてもらった奴の言うことか？」

そらの身体を地面に下ろしてやりながら、侍が首を傾げる。そらは眉を吊り上げ侍を睨んだ。

「ありがとよっ」

まるで礼など込めていない、ぶっきらぼうな口調で吐き捨てた。一度去りかけたくせに、と内心悪態づいた。

やれやれと侍が肩をすくめる。

「素直じゃねえな」

「いたぞ！ アイツだ！」

突然、背後から怒鳴り声が出て侍は驚いた。振り返ると、そこに数人の男達がいた。

「げっ、もう戻ってきた！」

「やっべ」と小さく呟き、そらは数歩後退った。

男達がズカズカと近寄って来る。

「おいガキ！ 俺らから金盗むたあ良い度胸じゃねえか！」

先頭の男が掴みかからん勢いでそらに手を伸ばした。それを素早くかわし、そらは隠れるように侍の後ろへ回り込んだ。

「……………は？」

侍が困惑した様子で、背後のそらに目を向けた。

「ここで会ったのも何かの縁だ！ そいつらやっつけてくれ！」

「はあ？」

侍は目を丸くして、突拍子もないことを言う彼女から、目の前の男達に視線を移した。彼らはかなり殺気立っている。

「やんのかあ？」

「そのガキ寄越せば、てめえは見逃してやるぜ？」

指をボキボキ鳴らしながら、男達は近付いてくる。

侍は短いため息を吐き、一步横に動いた。そしてそらの腕を掴み前へ引つ張り出す。そらはキョトンとして、引つ張られるままに前へ足を進めた。

「どうぞ」

「ちよつと待てーっ！」

そらは再び怒鳴り、振り返って男の胸ぐらを両手で掴んだ。

「助けを求めてるんだぞ！ それでも男か！」

「だって……痛い目遭いたくないし」

「ヘタレか！ 第一何だ、その腰にあるのは飾りか！？」

そらが怒鳴りながら彼の腰の刀を指差すと、侍は疲れたため息を吐いた。

「何か期待してるようだけどな、これは竹光だ。何も斬れないぞ」

彼はゆっくり柄を撫でる。そらは眉を寄せた。

「使えねえーっ！」

そう叫んだ途端、誰かに腕を掴まれ引つ張られた。

「おら、金返せやガキ」

すぐ近くに男達の顔が見え、そらはベツと舌を出した。

「誰がやるか、これはうちのもんだ」

「ふざけんなてめえ……殺すぞ！」

腕を掴む男の手に更に力が入り、その痛さにそらは顔を歪めた。

その時、そらの横を何かがかすめ、腕を掴んでいる男に当たった。男が怯んだ隙を逃さずにそらは腕を振り払って男達から離れた。飛んできたものをよく見たら、それは侍が被っていた編笠だった。

侍に目を向けると、彼は刀の柄を握りながらニヤリと笑う。

「盗んだ半分、おれに寄越せよ」

そらはポカンとした。彼の言ったことをすぐには理解できなかった。助ける代わりに盗みの半分をやれと、侍は言ったのだった。条件付けるなんて男らしくないし、やっぱり侍は嫌いだと思っただが、そう文句は言つてられそうになかった。先程、男達が短刀を手にしたのが見えたのである。

そらは腕を摩りながらニツと口の端を上げた。

「四割だ。それなら良い」

「んー、ま、それで妥協してやるよ」

侍は明るく笑い刀を抜いた。それと同時に男達も短刀を抜き、じ



りじりと間合いを詰める。

「三対一か、まあいいや。かかってこいよ」

腰を沈めて刀を構えると、一斉に男達が襲い掛かってきた。侍も彼らに向かつて躍り出た。

最初に振り下ろされた短刀を身をひねって避け、柄で男のこめかみを打った。気を失って崩れてきた彼の胸倉を掴んで投げ飛ばすと、次いで斬りかかろうとしていた男にぶつかり二人とも地面に転がった。それを見届けずに、もう一人に視線を移し、刀を構える。

残った男は面倒臭そうに舌打ちすると、転んだ二人を睨んだ。

「おい！ やめだ！」

そう怒鳴ってまた視線を良明に戻した。

「チツ……あいつどこに行きやがった……てめえら覚えてるよ、今度会ったらぶっ殺してやる」

ずらかるぞ、と言って男は走り出した。その後に気絶した者を担いだ男がっついて行った。

彼らが見えなくなったのを確認して、侍は刀を鞘におさめた。その様子を眺めていたそらは、振り向いた彼と目が合い僅かにたじろいだ。彼の刀捌きに見とれていたことを悟られないよう、慌てて笑顔を作る。

「や、やー、すげえなあんだ！ ありがとう」

「あれぐらいならな。それに礼を言われる程のことはしてねえよ、

金のためにやったようなもんだし」

肩をすくめて、侍は言った。

そらは笑顔を引きつらせた。礼を言つて損をした気分になった。どうしてこいつはこんな可愛くないことを言つのだらう。まあ、侍が可愛いこと言つたら引くけども。

彼を見つめたままそらは首を傾げる。

「お前、名前は？」

「名前を聞くときは自分から名乗れ」

侍に冷たく言われ、そらは少し口を尖らせた。だが彼が言つことは一理あるから反論は出来ない。

「うちは、そらだ」

「……そら？ そらつてこの？」

そつ言つて、侍は上を指差した。そこには青い空が広がっている。

そらは肩をすくめた。

「さあ？ それは分からん。うち字知らないからな」

「多分、空だろ。それしか思い付かねえしな」

「ま、それで良いよ。で、お前は？」

「良明だ」

彼が躊躇いなく名乗ってくれ、空は表情を明るくした。

「良明かー、じゃあ“よっしー”だな！」

「何でそうなる」

良明が怪訝そうに眉をひそめ、空は無邪気に笑う。

「この空様が付けてやったんだ、喜べよ」

「誰が喜ぶか」

くだらないとばかりに良明は呟き、頬を膨らます空を無視して肩をすくめた。

「お前、家は？送るから帰れ。ガキがこんなところウロウロするな」

そう言った途端、空が良明の脚を力の限り蹴った。良明が声にならない声で唸り、空は彼を睨んだ。

「ガキ扱いすんな！　　うちは十六だ！」

「……は！？　十六！？　　その大きさで？」

良明は蹴られた箇所を擦りながら、小さな彼女を目を丸くしてマジマジと眺めた。

正直、心底驚いた。どこからどう見ても十歳程度にしか見えない。顔も、十六と聞いても疑ってしまうぐらいに幼かった。

「俺と二つしか違わねえ……」

「へー、あんた十八か、見えねえな。どっからどう見てもおっさんだ」

空は嘲るように顎を突き出し、鼻で笑った。良明は間髪入れずに空の頭を片手で掴んでいた。空の身体がビクリと震える。

「ほー……おっさんな。お前も捻り潰してやるつか」

彼の冷たい笑顔に、空は思わず息を飲んだ。

「じっ……冗談だつて！ 間に受けるなよ！」

慌てて弁解して、良明の手から逃れるように空は一步後ろに下がった。

予想に反して良明があっさりと手を放して、不思議に思いながら空は彼を見上げた。

「スリなんて女がすることじゃねえなー」

そう言つて、良明は藍色の銭入れを目の高さに持ち上げた。中から鈍い金属音がする。

空はその銭入れを見て目を見開いた。彼が持っている銭入れは、先程空が盗んだ物だった。

「へっ、あれ!？」

慌てて懷や袂を押さえるも、勿論そこには何も入っていないかった。

「おっお前……いつの間に……！」

空は奪い返そうと手を伸ばしたり跳んだりしたが、その行動も虚しいことに意味を成さなかった。良明にヒョイとそれを高く持ち上げられ触ることも出来なかった。

空は眉を上げ、彼を睨んだ。

「返せよ！ 人の盗るんじゃねー！」

「いやいや、言ってること矛盾してるから」

良明が呆れたように笑う。

「それに四割はおれのもの、って約束だったよな？」

良明にそう言われ、空は言葉を詰まらせた。彼の勝ち誇ったような笑みに更に腹が立った。

「わ……… かったよ！ 勝手に取れば良いだろ！」

空はかなり不服そうに腕を組んだ。

（自分がスリだったのに……… すられるなんて……… 一生の不覚だ！）

空が大きく舌打ちをし、それを聞いた良明は吹き出した。

「面白いなー、じゃあ遠慮なく」

錢入れを開け、音を立てながら物色する。

その間、空は頬を膨らませて彼を見つめていた。他人とここまで喋るのは久しぶりな気がした。それなのにここまです人を苛立たせるとは、良明の振る舞いに少し呆れもした。暫くして自分の取分を手にしたまま良明は銭入れを空に投げ返した。受け取った空は、その重さに首を捻った。

「ありがとな、これでしばらく食いつぱぐれなくて済みそうだ」

良明は笑って言い、地面に落ちた編笠を拾い上げ、埃をはたいてから被った。

空は眉をひそめたまま彼を眺めていた。銭入れの重さが、大して変わっていない。

「家まで送らんで大丈夫か？」

空を見つめ、良明は尋ねた。

「ん？ ああ、うちに家はないから……旅してんだ」

「へえ、一人で？」

「そつだよ。お前もか？」

尋ね返すと良明は一度頷いた。

ふーん、と興味なさげに呟いた空だったが、すぐに意味深な笑顔を良明へ向けた。その笑みに、良明は嫌な予感を覚える。

「なあ、お前についてってもいいか？」

「イヤだ」

あっさり拒否して良明は空を置いたまま歩き出した。空は彼の答えの早さに眉を吊り上げた。

「即答かよ！ 少しは考えろよ！」

空が早足で追うと、良明はため息を吐き振り返った。

「イヤだって言ったら、ついて来んな」

「イヤだね！」

背後で空が怒鳴る。

「意地でもついてってやる！ 逃げたって無駄だかな！ うち足速いんだからな！」

追い付いた空を横目に良明は更に盛大なため息を吐いた。

「お前……うるさそうだからイヤだって言ったのに……ていうか実際うるさいんだけどな」

「へっ、シケた旅するよりマシじゃねえか。お前つまらん旅してるだろ」

頭の後ろで手を組んで、空はニヤリと笑った。

良明はやれやれと宙を仰いだ。静かな方が自分には合っているのに、と言いたくなった。

「まあ……シケた一人旅してたのはうちも同じかな」

浮かぶ雲を見上げ、空がポツリと呟く。その彼女の横顔が、淋しそうに見えた。

「なんつーかさ……あんたとなら大丈夫かなって思って……ほら、旅は道連れ、なんて言うじゃん」

空が恥ずかしそうに頬を掻いた。

空がどんな理由で、いつから旅をしているのかは知らない。でも、こんなに小さい、しかも女が一人で行動するということは、心細くて当たり前なのかもしれない。

(でも口悪すぎだろ)

良明は頭を掻き、長く息を吐き出した。

「あゝもう……好きにしろ」

そう言った途端、空が満面の笑みで振り向いた。突然向けられた表情に良明はたじろいだ。

「そここなくちゃ!」

空が嬉しそうに良明の腕を叩き、良明は短く笑ってヤレヤレと叩かれた腕を擦る。

「よし、じゃあ飯でも食いに行こうぜ。金もあることだしっ」



空が金の入った銭入れを鳴らした。

「良いけど、空のおごりな」

「は？ 何でだよ」

「おれは四割、空は六割。どっちが金持ちだ？」

良明は笑いながら首を傾げた。

「男が女におごらすのかー？」

頬を膨らます空の肩を、良明はポンポンと優しく叩いた。

「旅に女も男もないんだぜ」

そう言ってニコリと微笑む彼を、空は暫く睨んでから口を開いた。

「……………今日だけだかな！　うちが誰かにおごるなんて、滅多にな  
いんだぞー！」

怒ったように言い、空は足を速めて良明より前に出た。

(金……………少ししか取ってないくせに)

そう考えて、空は苛ついた。

良明なりの優しさなのかもしれないけど、約束は守らないと気が  
済まない性分だった。自ら言えば良いのdarougが、言ったらそれで

終わってしまいそうで言い出せなかった。

彼を信用できる気がしたのは、嫌々ではあったが、結局は、自分の事を助けてくれたからだ。これまで誰とも行動を共にしようとはせずにいたし、そうしなくても一人で生きてこられた。しかし良明に会って、何故か心細さを覚えた。ぶっきらぼうだったとしても、久しぶりに触れる人の優しさは、空には温かいものだった。

それに、初めて会ったはずなのに、彼は懐かしい匂いがした。

この感覚が何なのか、空には分からなかった。

目の前を歩く小さな背中を見て、良明は微笑んだ。

飯屋に入り、二人で適当なことを喋りながら遅い昼食を取っていた。昼を回って大分経ってからここへ着いたためか、客は空達だけだった。

ふと、良明の隣に立掛けられた刀が目に入り、空は尋ねた。

「なあ、お前の刀、何で竹光なんだ？貧乏侍か？」

良明はチラリと空を見て、また手にした茶碗へ視線を落としたり。

「別に、自分からこれにしてるだけ」

「ふーん……何で？今の時世、竹光とか馬鹿にされねえの？」

飯を口に運ぶ手は止めずに空が首を傾げ、良明は箸を持ったまま

机に頬杖をついた。

「お前……知りたがりだな。さっきから質問ばっか」

「いいじゃん、聞かないとよっしーのこと何も分かんねえだろ」

そう言っつて、味噌汁をすする彼女を見ながら良明は眉をひそめた。

「その、よっしーってもう決まりなのか？」

「他に思い付かねえもん」

「普通に名前呼べよ。お前頭悪いな」

「うるせえ、ぶっ殺すぞ」

空は酷い形相で良明を睨んだ。彼が楽しそうに笑う。

「てゆうか話そらすなよ。何で竹光なのかって」

空は良明の顔を覗き込んだ。良明は箸を置き、茶の入った湯飲み  
に手を伸ばした。

「そつだな……本音を言えば、罪悪感から。かな」

良明が静かに言い、湯飲みに口を付けた。

「罪悪感？」

空は訳が分からないと首を傾げる。一息ついてから良明はまた口

を開いた。

「二年前、戦があつただろ……美濃で」

「美濃……ああ、それなら知ってる」

時の太閤、豊臣秀吉が逝去してから二年後、徳川率いる東軍と石田率いる西軍が美濃の関ヶ原でぶつかった。この大規模な戦は、二年経つた今でも記憶に新しい。あまり関わりのない事だったが、噂ぐらひは甲斐で暮らしていた空にも入ってきた。

「それで？」と空は身を乗り出した。

「おれもそれに参加した」

良明があつさりとはき、空の思考は暫く停止した。

「……へっ？ えっ……あ、そうなんだ」

目を丸くして、良明を見つめ続けた。

そうなんだ、としか言いようがなかった。戦がどのような物なのか空には分からないが、先程の良明の刀捌きや身のこなし等を思い返すと、参加していても別に不思議ではなかった。

（だけどなんで今は浪人なんてやってんだろ）

空は怪訝そうに眉をひそめた。

大名同士の戦であつたのなら、良明もどこかの大名に仕えていた武士なのではなかるうか。立ち居振る舞いを見ている、少なから

ず足軽ではないように空には思えた。

(もしかして負け戦……だったのかな)

そう疑問に思ったが空は尋ねることが出来なかった。二人の間に沈黙が流れる。

「え、えっと……それと竹光とどんな関係が？」

空は慌てて口を開いた。

「……人、たくさん斬ったからな……それが罪悪感」

良明が視線を落としたまま苦笑する。

血と火薬の入り混じった匂いに、山のような数え切れない程の死体の中に立つ自分。今でもよく思い出してしまう、残酷な光景だった。

「……でもさ、そうしないと、よっしーが死んでたかもしれない訳だろ。そこまで引きずらなくても良くね？」

空はキョトンとして言った。彼女の表情に、良明は思わず力が抜けた。

「楽観的だな。ま、あそこにいなかったお前には分かんないだろうし……人に言うつもりもないし。この話はこれでおしまい」

一気に喋り、自ら話を打ち切った。空に全部を聞かせるような内容でもない、良明自身が判断したからだ。

一方、空は俯に落ちていない表情をしていた。

「まあ、別にいいけど……」

空は拗ねたように口を尖らせて、卓上を睨んだ。

出会って間もないから、良明が何もかも話してくれるとは思っていない。でも何故かつまらなくも思えた。

「あらあら、こんな真つ昼間から若い者が暗い顔して」

二人が沈黙していた時、急に近くから女の声がした。そちらに目をやると、この飯屋の女がクスクス笑いながら近寄ってきた。

「食べ終わったんならこれ下げちゃうよ」

「ああ、全部持ってっちゃってー」

だらけた空が手をプラプラ振る。

「何だい、元気ないねえ」

盆の上に食器を重ねていき、女は二人の顔を交互に見つめた。空は彼女を見上げ、肩をすくめる。

「元気は有り余ってるから、ご心配なく」

「ふーん、じゃあ二人でケンカしちゃったとか」

どうやら彼女は詮索好きのようで、ニコニコしながら更に尋ねた。空と良明は目を合わせ、ヤレヤレとため息を吐く。

「おっ、おつかあ！ またアイツらが……！」

女の娘だろうか、窓近くにいた少女が慌てた様子で走り寄ってきた。途端、女の顔は険しくなった。

「あいつら？」

空は彼女を見上げ、首を傾げた。

## 一、遠い記憶 (2)

女は苦笑を浮かべ、空達に目配せする。

「……取り立てなんだ。最近しつこくてね……騒がしくなるけど、ちょっと我慢してくれよ」

そう言って、女は戸口へ向かった。その後ろ姿を空と良明は目で追っていく。

女が戸口に辿り着く前に、戸が激しい音と共に開かれた。

「しつこいよ、あんたら」

女は強気に腕組みし、取り立て屋と見られる男達と対峙した。

その男達を見た空と良明は、大慌てで机の陰に隠れた。彼らはさつき空が金を盗み、良明が気絶させた者達だった。

「な……何でよりによってあいつらなんだよ……!」

「おれが知るか」

二人はひそひそと喋り、事の成り行きを陰から見守った。

「お泉さんよ、金の準備は出来たのか？」

「今日で期限も切れるぜー」



男達はズカズカと店の中に入り、泉の周りを取り囲む。

「誰が払うって言ったかい。ふざけんのも大概にしな」

泉は腕組みをしたまま、彼らを睨み付けた。彼女の目の前にいる男が、ニヤニヤしながら更に泉に近寄る。

「相変わらず強気だな。でもな、こつちには誓約書つーもんがあるんだわ」

そう言っつて彼は懐から紙を取り出す。

机の陰に腰を下ろしていた良明は、まだ近くに少女が佇んでいるのに気付いた。見たところ彼女は空より少し若いくらいで、空の方が断然幼く見えるが、襷に前掛け姿であるからこの店の手伝いをしているのだろう。この母娘の他に人は見えないため、この店はきっと泉と呼ばれた先程の女の店だ。その娘はオロオロと母親を見守っている。

「おい」

良明が小さく声を掛けると、少女は微かに身体を震わせ慌てて振り向いた。彼女を手招き、自分達の前に座らせる。

「あいつら、何の取り立てしてんだ？」

良明がヒソヒソと尋ねる隣で、空は良明から少女へ視線を移した。少女は居心地悪そうに床を見つめている。

「それは……去年死んだおつとつが、あいつらに金を借りたらしくて」

「はーん。親父が死んだから、代わりに払えってやつか。よくある話だな」

呆れたように、空は片膝を立ててそれに頼杖をついた。少女は俯いたまま、膝の上で両手を握り締めている。

良明は少女の様子を見て、空の頭をはたいた。

「いでっ」

「お前は喋んな」

空は頭を押さえて良明を睨んだ。

「……あいつら、理不尽な額請求してきて……払えるわけないじゃない……」

震える声で少女が呟く。

「でも払えなかったら、この店を取り上げるって言っし……あの誓約書のせいで」

彼女が言いかけた時、けたたましい音が響いた。

「おつかあ！」

空達が振り向くと同時に、少女は飛び出して行った。壊れた机の間に、泉が倒れている。

「いい加減にしるよお？俺あ金すられて胸糞が悪いんだよ」

男が椅子を蹴散らす。泉は娘に支えられながら起き上がった。男達は二人を見下ろした。

「金払え。払えないならこっから出ていけや」

すると、急に少女は立ち上がり、彼らを真正面から睨み上げた。

「……で、出ていくのはあんた達だ！」

「お千代！ やめな！」

泉は慌てて娘の手を引つ張ったが、千代はそれを振り払った。

「あんた達に出す金なんかないって、言ってるだろ！」

千代がそう叫んだ途端、男に首を掴まれ軽く持ち上げられた。

「母親といい娘といい……調子に乗りやがって」

首を締め付けられ、上手く呼吸が出来ない。

「何なら、お前の身体で返してもらおうか？」

千代の顔を覗き込み、男がニヤリと笑う。千代はべーと舌を出した。

「誰がそんなこと あっ！」

右頬に衝撃を受け、千代は床に叩き付けられた。

「な  
」

泉達を静かに見守っていた空は、驚いて目を見開いた。同時に怒りも湧いてきた。

良明が空の様子に気が付いた時には、既に彼女は立ち上がった机の上によじ登っていた。

「待て待てーっ！ お前ら女に手え上げるたあ腐ったマネするじゃねえか！」

ドンと机を踏み鳴らし、空が響く声で怒鳴る。

良明は「ああ……」と片手に顔を埋めた。

（待つのはお前だ……）

こうなることは、予想していなかった訳でもない。でも予想外に、空が切れるのは早かった。大きなため息を吐き、良明も立ち上がる。

「調子乗ってんのはテメエらだろーがっ！」

「はいはい、落ち着こうね。ていうか下りなさい、はしたない」

良明が空の腕を掴んだ。それでも空はそこから動こうとしなかった。

「な……お前ら！　こんなとこにいやがったのか！」

千代を殴った男が驚いた表情を見せ、空は薄笑いを浮かべた。

「お前らが結構な金持ってたんでなー、お陰で飯が食えたぜ。ありがとよ」

「挑発すんなって……」

良明が面倒臭そうに呟いた。一方男達は、額に青筋を浮かべ今にも暴れ出しそうな雰囲気をしている。彼らの様子を見て、良明はあつことを閃いた。

「……空。お前特技は何だ」

「は？　スリだよ」

いきなり何聞くんだと、空は眉をひそめて良明を見下ろす。

良明は人差し指をちよいと動かし、彼女に顔を近付けた。空も怪訝そうに、頭を彼の高さに合わせた。

「要するに、あの紙がなければ良いんだろ？」

良明が小声で言い、ニツと笑う。空は彼の顔を見つめ、暫くしてから口の端を上げた。

「わかった、そういうことなら任せろ。でも援護はしてくれよな」

「わかってるって」

二人は頷き合い、男達の方へと身体の向きを変えた。空が机から身軽に飛び下りる。

腕組みしている男が空達を睨み付けた。

「金を渡す気あんのかあ？」

そう尋ねられた空と良明は一度目を合わせ、同時に口を開いた。

「「ないね」」

男が懐から匕首を取り出し、それに倣うように他の男達もそれぞれが武器を手にする。良明は頭を掻いた。

「おいおい、物騒な奴らだな。空、お前だけ丸腰だけどうする」

「へん、心配すんな。うちも武器くらい持ってら」

空は懐から棒のような物を取り出し、それを良明に見せた。何の装飾もされていない、真っ黒な懐剣だった。

「紙盗んだらよっしーに投げるからな、お前が処分しろよ」

それだけ言っつて、空は颯爽と男達目掛けて走り出した。

「えー!? おい! もう少し作戦とか 何でお前は即行動なんだよー!」

馬鹿野郎! と叫びながら良明も彼女の後に続く。しかし良明は男達の方ではなく、泉達に走り寄った。

「お泉さん！ 二人共奥に逃げててくれ！」

「……ああ、わかった。無茶はしないでくれよ！」

急いで立ち上がり、泉は千代を連れて奥へと走って行った。

彼女達を見届け、良明は暴れ回っている空に目を向けた。小さいこともあつてか、彼女は襲いかかる男達の隙間をすり抜けていく。

（刀相手がやけに慣れてるな……誰かに鍛えられたのかな）

空の動きにこっそり感心しながら良明は刀を抜き、地面を確かめるようにトントンと爪先で数回蹴った。

右に突き出された短刀をかわし、近くにいた男にわざとぶつかるついでに足掛けをしてその男を転ばせた。

（よっしゃ、成功！）

空は手にした紙を握り締めた。

（後はよっしーに……えっ？）

良明の方へ振り返ったところ、そこに男が一人立ちはだかつていた。驚いたのも束の間、彼はすぐに崩れてしまった。空は何度も瞬きをした。更にその後ろに、良明が刀を手に立っている。

「空、紙は？」

「……あ、盗った！」

空は紙を握り締めた手を挙げ、それを見た良明が笑う。

「じゃあそれ持って調理場行け。そんで竈にでも放り込んでこい」

「おう！ 任せろ！」

空が良明の横を走り抜けて行った。

一方、空に転ばされ尻をついた男が慌てた様子で懐を探っている。

「……ねえ！」

「あれー？ どうかしたのかなー？ 無くし物？」

ニヤニヤ笑いながら良明が首を傾げる。

「てっ、てめえら……っ！」

男は頬を引き吊らせて立ち上がり、良明を睨んだ。

「ぶっ殺せ！」

男が叫ぶと、彼らは一斉に良明へと襲いかかった。

「相手が悪かったな」

良明は刀を鞘に収め、床に転がっている男達を見下ろした。同時に後ろから軽快な足音と共に空が走り寄ってきた。



「よっしー、紙燃やしたからな！ お前大丈夫だったか？」

「余裕。こいつら片付けるから、空も手伝え」

「よしきた」

空は揚々と頷き、転がる男達を引つ張り始めた。

二人で彼らを店の外に放り出し、中に戻ると泉と千代が笑いながら近付いてきた。

「あんたらやるねえ！ ありがとう！ すごく助かったよ！」

泉がバシバシと二人の肩を叩き、その激しさに空はよろめいた。良明は苦笑して頬を掻いた。

「いや……なんというか、お泉さん達が殴られたのに責任感じてな」

「ん？ どうしてだい？」

泉が首を傾げる。

「あいつらから金盗んだのうちらなんだ」

空は愉快そうに笑った。

「あらまあ、あんた……そんなに小さいのに盗みができるのかい？」

「小さい言っとなっ！ ガキじゃないから！ 十六だから！」

「あら、十六？ 本当に？ お千代より上じゃない、小さいわね」

泉が目を丸くする隣で、千代も驚いた様子で空を見ていた。空が眉を吊り上げる。

「だーからー、小さいって言　よっしー？」

良明に目をやると、彼は何故か戸口を見つめていた。空は眉をひそめて彼の顔を覗く。

「よっしー、どうしたんだ？」

そう言っつて袖を引つ張ると、良明はチラリと空を見てすぐに戸口に視線を戻した。彼は始終、険しい表情をしている。空は怪訝そうに首を傾げた。

「……血の匂いがする」

ポツンと呟くと、良明は足早に戸口へ向かった。

「血？」

空も引かれるように彼の後を追った。

良明が開いた戸の向こうの光景に、空は凍り付いた。地面にも家の壁にも飛び散った大量の血痕。そこはさつきとは一変して、血の海だった。

無惨に転がる首の無い死骸。斬られた箇所からは、まだどす黒い

血が溢れ出ている。その向こうに、この身体の持ち主達であろう顔の崩れた首が、転がっていた。通りにいる人々は悲鳴を上げ、ざわついていた。

その光景と匂いに、空は胃から込み上がってくるものを覚えた。

「……………」

両手で鼻と口を押さえ、目をキツク閉じた。

遠い、過去の記憶が蘇ってくる。思い出したくない記憶が。

「馬鹿……………何で見るんだよ」

良明が空の頭を引き寄せた。彼にしがみついて、空は呼吸を繰り返した。それなのに空気が身体に入っていない。

「何だい？ どうかした」

「来るな！」

良明が大声を出し、近寄ろうとした泉達は驚き足を止めた。

（誰がこんなこと……………）

良明は軽く舌打ちした。どう見ても、この死骸は先程良明が気絶させた者達だった。目を離れたのはほんの少しの間だった。その間に全員の首を斬れるとは、これを犯した者がどれだけの力量があるのか計り知れない。

嫌な予感が頭をよぎり、良明は無意識に腕を擦った。

「大して力も無いくせに出しゃばるから」

突然側から男の声がして、良明は反射的に空を後ろに庇った。戸口の横の壁に着流し姿の男が一人立っていた。彼は無表情で血の海を眺めている。黒い着物に返り血を浴びているのに、気にも止めていない様子だ。腰には二本の差料もある。

良明は目を見開き、同時に全身で警戒した。

「……お前……何で」

良明の口から漏れた言葉に、男はボサボサの髪を揺らし顔だけを向けた。その唇がニヤリと笑みを形作る。

「何でここにいたかつて？ 聞きたいか？」

良明は眉を寄せて彼を睨んだ。

「……別に、興味ない」

「まあそう言うなよ。俺はな、あの日以来色んなところを転々としてんだ」

良明の言葉を無視して、彼が勝手に話し出す。

空は良明の背後からそのひよろりとした男を盗み見た。

真っ黒な単衣に付いた血は乾き始めていた。背丈は良明よりも高かった。細く見えるのは単衣の色のせいだ、良く見ればそれなりにがたいのいい男だった。太陽は照っているというのに、彼の髪は生氣を失っているかのように光を反射させていない。それでも黒い目の奥には確かな光があった。

「面白い事探してんだ、暇だからな。そしたらこいつらに会ってよ。少し同行してたけど、もう飽きたな」

「……だから殺したのか？」

良明が低い声で尋ねると、彼は嘲るように笑うだけで何も言わなかった。良明は舌打ちした。

「相変わらず……無慈悲な野郎だな」

「慈悲をかけて何か得するか？ 俺は仏じゃないぜ」

壁から離れ、男は死骸に近寄り、それを踏み付けた。反動で地面の血が飛び散る。

「ちょっと大人しくしてれば、調子乗って殴ってきやがる。うざいだけだ」

彼はそう吐き捨てるように言い、急に良明へ振り返った。良明は思わず身構えた。

「流石に、お前にこんなところで逢うとは思わなかったな」

男は喋りながらゆっくり良明へ近づく。

「どうせ、まだ俺の事を恨んでるんだろ？ なあ、良明」

嫌味に笑い、良明の顎に指を添えてクイと上を向かせた。良明はずっと嫌悪の眼差しを彼に投げていた。

「あの頃と全然変わってねえな、その眼」

「……触るな」

良明は彼の手を払い退けた。すると、急に通りが騒がしくなった。

「おっと、役人登場か。じゃ、俺はずらかるぜ」

そう言って、男は歩き出した。しかしすぐに立ち止まり、また振り返る。

「お前とはまた逢うかもな。お前が俺を恨んでる限り、な」

ヒラリと手を振り、男は今度こそ姿を消した。

良明は戸に寄りかかり、長く息を吐き出した。無意識の内に緊張していたらしく、それが解けてドツと疲れが溢れた。

「よっしー、あいつ知り合いか？」

突然背後から話し掛けられ、良明は驚いた。慌てて振り向くと、空が不思議そうにこちらを見上げている。彼女がいたことをすっかり忘れていた。

「まあ……知り合いと言えば、知り合いかな」

「ふーん……何か気色悪い人だったな」

空は男が消えた方へ目をやった。その反対側から役人が走ってきて

ている。

「……人じゃない」

良明がポツンと呟いた。空はまた良明を見上げた。

「あんなやつ……人じゃないよ」

彼は無表情で、何を考えてそう言っているのか空には分からなかった。

この日は泉の強い勧めから、彼女の家に泊まることになった。良明が最初それを断っていたが、空は強引に彼を引き止めた。あの後に出発しても野宿になりそうだったから、空にしては泉の申し出は有り難かった。それに良明の口数がやけに少なく、二人きりになるのが不安だったのもあった。

夜になり、二人は借りた部屋で就寝の準備をしていた。その間も良明の無言は続いた。

空は自分の布団にうつ伏せに倒れ込み、長く息を吐き出した。

「……火、消すぞ」

良明がチラと目を向けたので空は頷いた。行灯の火を吹き消し、良明も布団に横になった。

「……よっしー」

暗闇の中、空は小さく呼び掛けたが、彼からの返事はない。空は頬を膨らませた。

「もう寝たのかよ」

「……何だよ」

良明がため息混じりに尋ね返した。

「昼のあいつ……誰なんだ？」

空が尋ねても、良明は返答せずにまた黙り込んだ。

静かな時間が流れていく。沈黙があまりに長く、空が諦めて寝ようと思った時、良明が口を開いた。

「あいつは……おれの……師匠を殺した」

「え……？」

良明がため息を吐いたのが聞こえた。

「師匠って言うかおれが慕ってただけなんだけど……ガキの頃から面倒見てくれてたから」

空は無言で、声のする暗闇を眺めていた。

「……あの時おれは何も出来なかった」

その言葉の後に、微かに乾いた笑い声が聞こえた。



空は目を伏せ、闇を睨んだ。良明の話と共に自分の過去が頭に蘇った。自分はただ守られるだけで、弱い生き物だと思い知らされる、あの日の事が。空は唇を噛み締めた。

「……………空？」

急に呼ばれ、空は小さく身体を震わせた。

「ん、何？」

「ああ、寝たのかと思った……………ガキだから」

「……………てめえ殺すぞ」

空が低く唸ると、良明は明るく笑って寝返りを打った。

「おれ、もう寝るからな」

「勝手に寝ろってんだ」

空も拗ねたように寝返りを打ち、良明に背を向けた。掛布団を握り締めて、暫く闇を見つめる。良明とは今日初めて出会ったはずなのに、それなのに。

「よっしー」

「……………ん？」

良明が返事をする、何故か空は黙り込んだ。不審に思い彼女の

方へ顔を向け、良明は首を傾げる。

「何だよ」

「あんたとうち……似てる」

「は？」

「どこが？」と良明は尋ねた。

「似てるよ」

空はもう一度繰り返して、すぐに目を閉じた。

「あゝあ、お泉の料理は名残惜しかったな」

朝日の降り注ぐ道を歩きながら、空が呟いた。今日も快晴で、穏やかな一日になりそうだ。

泉は今日の朝餉と、握り飯を拵えてくれた。昨日も思っていたのだが、泉の料理は美味かった。お袋の味、という表現が一番合う気がした。母親の料理なんて、一度も食べたことはないから、想像の内話だが。

「お前さつきからそれしか言ってねえぞ。そんなに食いたいなら戻れば？」

良明は呆れ果ててため息を吐く。

「イヤ、めんどくさい」

あっさりと言い、空が大きな欠伸をした。

「じゃあ二度と言っな」

「はいはい、すみませんねうるさくて。あゝあ、お泉の料理食いた  
い」

空は頭の後ろで手を組んだ。良明は無視することに決めた。

「……なあ、よっしーの旅の目的は？」

空は隣を見上げた。

「昨日聞いてねえよな？」

良明は前を向いたまま何も喋ろうとせず、空は頬を膨らませ彼の横っ腹を殴った。良明が盛大にむせた。

「いってえな」

「シカトしてんじゃねえ！」

「……別にシカトしてねえよ。何言えばいいか考えてただけだ」

良明が怒ったように言った。空は彼を見上げたままキョトンとした。

「そんなに複雑な目的なのか？」

「んー……そこまでは……」

再び考え込むように良明が腕を組む。空は視線を彼から地面に移した。

「じゃあ……師匠の仇討ちとか？」

ポツンと呟いた彼女に良明は振り向く。少し俯く空は何故か拗ねた様子だった。そういえば昨夜その話をしたと、良明は思い返した。

「仇討ちね……まあ、それを少しも考えてないつつたら、嘘になるかな」

「ふーん……」

「でもそれが本当の目的じゃない」

顔を上げた彼女と視線を合わせ、良明は話し続ける。

「おれがすぐ勝てるような相手だったら、昨日の内にとやったださ」

「それも……そうだな」

「あいつとはいつか殺り合うことになるかもな」

あまりに軽い口調で彼が話すため、空は呆気に取られて返す言葉が出てこなかった。

(殺り合うつて……お前の刀、竹光……)

こちらは心配に思っているの、彼はけろりとしていた。余計に脱力してしまう。

「空は？」

「……何が？」

不意に良明が振り返り、空はやる気なく首を傾げた。

「旅の目的。聞いたならお前も話さないとな」

彼は悪戯っぽく笑った。

「うちは……簡単に言えば人探しだ」

「へえ、誰を？」

「……教えない」

空はプイと顔をそらした。

「えー、卑怯じゃねー？」

「うつせえな、お前には関係ねえだろ」

ぶっきらぼうに吐き捨てる空を見下ろし、良明は眉をひそめた。

「お前、何拗ねてんの？」

空はギクリとした。

「べ、別に拗ねてねー……から」

あからさまに動揺しきった声になった。

自分が良明の事について尋ねたら、彼はそれなりにちゃんと答えてくれる。それなのに自分の事となるとどうも話せなくて、それもどかしくて、自分に腹が立つ。別に隠すことはないのだけど、ただ、昔の自分を思い出すのが嫌だった。

「おい」

思い詰めた表情で俯いていたら、良明が顔を覗いてきた。顔を上げると、彼がため息を吐く。

「あんな。拗ねるのは別に構わないけど、暗くなるなよ。うるさいのがお前の取り柄だろ」

目をパチクリとさせ、空は良明を見つめた。

「違うか？」と彼は首を傾げる。

良明の言うその取り柄はどうかと思っただが、でも何故か単純に嬉しかった。空はへへと笑った。自分の事を話すのはいつでも出来る。だから、ゆっくりり少しずつでいいかなと、良明の一言でそう思えた。良明が空の頭をクシャクシャと撫でた。

「シケた旅は嫌なんだろ？」

「……そうだけど……やめろ！ ハゲる！」

両手を使って良明の手を払い退けると、良明が短く笑い声を上げた。空は髪を整えながら彼を見上げた。

「で、今からどこ行くんだ？」

「さあ？」

良明は肩をすくめた。

「さあって……もしかして、今何も考えないで歩いてんのか」

「うん。行き着くところに行けばいいかなーなんて」

「お前な……」

空は思わずうなだれた。こんなに何も考えないやつだとは思ってもしなかった。

「それなら、空が行くところあったらそっち行こうぜ」

良明にそう尋ねられ、空は暫く考えを巡らせた。

「ない！」

「だと思った」

良明が大きく頷く。

「じゃあもう行き着くところに行くしかないだろ」

「……そんなんでいいのかよ」

「え、だって今までがそんなノリだったし」

笑いながら良明は手をプラプラと振る。

(うわぁ……後先不安)

そう思いながらも、人の事は言えないと気付き、口にはしない空  
だった。



一、遠い記憶 (3)

\* \* \* \* \*

血の匂いしかない。

戦は既に結果を与え、裏切り諸々により西軍は壊滅、四散した。戦は終わった。しかし辺りを漂う粉塵はまだ消えようとしなかった。それはまるで良明の晴れない心情を表しているようだ。周りに、数え切れない程の死体が転がっていた。

自分の腕の中に横たわる息絶えたこの人の顔を、どれくらい見ているのだろう。既に死んでいたのだが、この人の首を狙い、多くの敵が襲いかかってきた。それを阻止する為に修羅の如く刀を振り、一人残らず斬り伏せた。

良明も槍で突かれ、鉄砲で撃たれ、具足はぼろぼろになり至る所に傷を負った。身体中に激痛が走り、血が大量に抜けて意識も朦朧としている。だが、それでも倒れようとはせず、この人の傍らを離れようとしなかった。

この人の死は突然すぎて、良明の未熟な心ではすぐには受け止められずにいた。

「　　こちら、全部お前が殺つたのか？」

その男は突然、背後から話し掛けてきた。

「その紋……徳川か。若いのに大したもんだ」

傍らに折れて倒れている旗を見て、男は笑った。その男の笑い声は、何故かずっと耳に残る響きをしていた。

「勝ったつーのに、浮かない顔だな」

目の前の男が自分の命を狙う敵であったとしても、闘う気力など、既になかった。何の為に生きているのかも分からない。

どうして自分は此所にいる。

無気力に、良明は口を開いた。

「なあ……おれを……殺してくれないか」

死体を覗いて回っていた男は動きを止め、振り返った。

「死にてえならな、他人に頼む前に、てめえで腹切れ」

男は良明の髪を片手で掴み、上を向かせる。

「これだけ人斬ったやつが、腹切る度胸もねえのか。小僧」

\* \* \* \*

木の葉の隙間から朝日が降り注ぐ。

昨晩は町にも村にも着かない内に日が暮れたため、道からそれた所の森で野宿をすることになった。勿論、空はしつこく文句垂れた。良明は暫く眩しい光を眺めていた。まだ朝も早く、冷えた空気が肌には痛い。

(…………腹切る度胸…………か)

髪を掻き揚げ、長くため息を吐いた。

二年前の戦の夢を見る事はこれまで幾度となくあった。多分、これからもあの日の事からは離れられないと、何処か諦めている自分がいた。逃げる事は出来ないのだ、と。

良明はやれやれと思いつつながら身体を起こした。同時に腹の上から何か重い物が転がり落ちた。それを見た良明は呆れ果てた。

今は地面で寒そうに丸まって寝ている空だが、さっきまで良明の腹を枕にしていた事は間違いない。現に転がり落ちた事が不服だったのか、眠りながら空は唸っている。

良明は彼女の頭を軽くはたいた。空はビクリと身体を震わせ、勢い良く起き上がった。

「っ…………何!? ……ってよっしーか」

良明は彼女を睨んだ。

「人の腹を枕にすんじゃねえよ」

そう言うと、まだ頭が働かないのか、空はキョトンとした。しかし次の瞬間、彼女の顔が赤くなった。

「しっ…………してねえよー!」

「はあ？ おれの腹から落ちたとこ見たんだけど」

良明が眉をひそめた。空は恥ずかしそうに視線を泳がせると、唐突に立ち上がった。その行動に良明は驚いたようだった。

「ち、近くに川あったよなっ、か、顔洗ってくるから」

身体の向きを変え、空は全速力で駆け出した。すぐに空の姿は見えなくなった。

「？」

一人残された良明は訳が分からない様子で首を傾げた。

川の畔に膝をついてバシヤと顔に水をかけ、手で顔を覆ったまま空は固まった。

良明と共に行動して数日、既に彼といるのが当たり前になっていた。彼の側にいると安心することを、空は覚えるようになっていた。

(ああ……それにしても……はずかし)

両手の隙間から長いため息を吐く。

昨夜は満月だった。星の見えない夜空に、ぽつんと浮かび上がった白い丸。綺麗だと思っけれど、好きにはなれない物だった。

不安でたまらなかった。だから昨夜は良明にこっそり寄り添って寝た。彼の温かさは心地よく、不思議と落ち着けて眠ることもでき

た。

空は手を下ろし、水面に写った自分の顔をぼんやり見つめた。

「おら」

突然、そっけない言葉と共に横から手拭いが差し出された。そちらを見ると二人分の荷物を持った良明の姿があった。空は彼の姿を暫く眺めてから、手拭いを受け取った。

「ありがとう」

彼女が顔を拭く傍らで、良明も数回顔を洗った。春と云えど川の水は氷のように冷たい。良明は空から手拭いを受け取り、顔を拭いてから川の水に付けて軽く洗った。

水が揺れる様子を眺めながら、空は思い付いたことを口にした。

「今日も町とかに着かなかつたらどうすんだ？」

「いや、もうすぐ着くはずだ」

空は良明へと振り向き、眉をひそめた。彼の言い方が、まるで初めからどこかを目指しているかのようだった。行き着く所に向かっていたのではなかったのだろうか。昨日空達が発った村では、良明は道を聞いているような素振りは一切見せなかったはずだ。

「どこに行

」

けて………！

空は弾かれたように顔を上げた。

「どうした？」

手拭いを絞りながら、良明は彼女へ目をやる。

「声がした」

「声？」

良明が怪訝そうに尋ねた。

空は立ち上がって辺りを見渡した。幻聴なんかではなかった。確かに聞こえたのだ。悲鳴のような子供の声が。

一度首を傾げてから良明は耳を澄ます。

「たすけてえ！！」

二人は同時に川の上流へ顔を向けた。子供らしき姿が浮き沈みしながらこちらへと流れてきている。

「ほら、やっぱり」

「ああ……本当だったな」

良明が面倒臭そうに答える。

「よっしー助けてやれよ」

「あ、やっぱりおれなんだ」

「当たり前だ、うち泳げねえもん」

胸を張って空が言う。

「それ自慢にはならねえぞ……」

呆れたようにため息を吐いてから、良明は裸足になって川に入った。流れはそれほど速い訳ではない。しかし水かさが良明の胸下まであり、子供にとってはかなりの深さである事が分かる。

泣きじゃくっている子供が良明の所まで流れ着き、その子供を片手で掴み、良明は空がいる岸へと戻った。

「うっ……う……うわあああああっ」

「はいはいもう大丈夫だから、泣くな」

腕に力いっぱいしがみつくと子供の頭を良明は乱暴に撫でる。子供を抱えたまま岸に上がると、空が心配そうに見上げてきた。

「空、ゆうべ寝たところに火おこして来てくれ」

「あっ、うん分かった」

空は慌てて来た道を引き返して行った。

それを見送った良明は子供を畔に下ろし、おもむろに自分の袴の帯をほどき始めた。

「あーあ……朝っぱらから水に浸かるって……空のやつ泳げねえと  
かありえん」

ぶつぶつ文句垂れながら良明は着物を脱いでいった。彼の傍らにいる子供は未だにしゃくり上げている。良明は子供を見下ろし、やれやれと肩をすくめた。

見た目は七、八歳くらいで、髪を肩の高さで切り揃えている。肌が透き通った白さをしていて、一見少女のようで、角度を変えると少年のようにも見えた。

良明は子供の前にしゃがみ込んで顔を覗く。

「お前も着物絞らねえと、風邪ひくぞ……て言うかお前いいナリしてんな。いいとこの子供か？」

良明は子供の着物の袖を触った。着物の素材は絹のようだ。白地に淡い色で何かの模様が描かれていて、緋色の袴も上等そうだった。

「白に緋って……巫女みたいだな」

良明は笑って言い、自分の着物を絞った。水が滝のように出てくる。そして絞り終わった着物の袖にまた手を通した。いつの間にか泣き止んだ子供は、興味深げに良明を見上げていた。

「冷てー……今日で乾くのかこれ」

半分諦め気味に良明が呟いた。それを聞いた子供は急に顔を輝かせた。

「わたしが乾かします！ 助けてくれたお礼に！」

袴の帯を締めていた良明が「え？」と言うのと同時に、子供は懐から何かを引っ張り出した。ちらと白い石のようなものが見えた。すぐ両手で握り締めたため、それが何だったか良明には分からない。



小さな口が動き何かが呟かれた瞬間、どこからともなく突風が良明を襲った。

「わっ」

良明は咄嗟に両腕で顔を庇った。不思議と温かいこの風は、長いこと良明達の周りを巻き上げるように吹いていた。

がさがさと草木の揺れる音に空は振り返った。良明が子供の手を引いて現れた。

「よっしー遅かったじゃないか。風邪ひく……何か乾いてる？」

空は不審そうに眉をひそめた。見た目で分かる程、良明達の衣服に濡れた様子はなかった。良明が困惑したように頭を掻いた。

「いや、うん……乾いてる」

「は？」

空はポカンと口を開けた。

「こんな早く？」

「おれにも分かってねえんだよ……説明してもらったけど」

そう言って、良明は隣の子供に目を向けた。子供はニコニコして二人を交互に見つめている。空はどこか嬉しそうにしている子供へ

視線を移した。

「お前が何かやったのか？」

「うんっ」

子供が揚々と頷き、空は少し呆気に取られた。

「名前は？」

「円！」

円（つぶら）と名乗った子供は、どこからどう見ても七、八歳くらいの子供だった。空は良明を見上げて首を傾げた。彼は肩をすくめるだけで何も言わない。空はまた円に目を向けた。

「円……溺れたとき頭打ったんじゃないか？」

「ええっ、打ってないよ。ちゃんとわたしの力だもん」

円は怒ったように頬を膨らませた。良明が円の頭に手を置き、神妙に頷く。

「こいつが言ってることは本当だと思うぞ。実際おれが体験してる訳だし」

そう言った彼の声も、まだどこか半信半疑だった。空は自分の髪を掻いた。

「んー？ お前術か何か使えるってことか？」

「ん……」

円は一瞬宙を仰いだ。そして何も言わないまま空に近付いて隣に座り、懐を探った。円が取り出したのは、紐が通された小さな乳白色の石だった。丸の一ヶ所を引つ張ったような形　いわゆる水滴の形　で、細まった方に穴が開けられおり、厚みは然程ない平石だ。空は怪訝に思いながら、石を握り締める円を見つめた。その後ろに良明が近寄る。

円の口が動き、小さな声で呟いた。空が何かの歌の一節かなと思つた時、周りの木々がざわめきだし、突然、目の前の焚火が大きくなつた。その爆発したような炎の音に空は身体を震わせた。

「……おい、空」

「ごうごうと爆ぜる炎を見つめていると、良明がどこか緊迫した様子で空の肩を掴んだ。顔を上げて、空は辺りを見渡した。」

青々としていた木々の葉が次第に色付き始め、赤や黄に染まっていく。瞬きを数回繰り返す内に自分の周りがすっかり秋の装いになり、空は目を見張つた。時期の違う日差しのせいか、紅と黄金の色合いは、目を閉じたくなる程に眩しく鮮やかに感じられた。

そしてその葉も枯れ、一枚、また一枚と地面に落ちる。枯れ葉がはらはら散っていく様に、急に一人ぼっちになつてしまったような心細くなる程の不安を覚えた。生気を失つて一斉に萎れていく音が、不気味さを際立てる。そこは一転して、寒々しい冬景色となつた。ただその光景に違和感を覚えるのは、空気の温かさが変わつていないからだつた。

視覚に感覚が追いつかず、混乱は増すばかりだ。鳥肌の立った腕を擦り、空は息を吸い込んだ。

その時、みずみずしい花と緑の匂いが胸を満たし、枝から小さな芽が息吹を上げ始めたことに気付いた。これまで嗅いでいた匂いに戻り、安堵を覚えた空は嘔み締めるように深い呼吸を繰り返す。

円が振り返ってほうと息を吐いた。

「ここじゃこれが精一杯です」

円は手の甲で額を拭い、更に告げる。

「腕を見てみて」

空は怪訝に思いながらも袖を捲った。自分の腕を見下ろして空は息を呑んだ。昨夜、この森に入ってくる際に木の枝が当たってできた切傷が、今や跡形もない。一瞬、切傷は夢で見たことだったのだろうかと考えたが、切ったことによりて血が出たことも、良明に文句垂れたことだって空は覚えている。塞がったのではなく、元から傷などなかったかのようきれいに消えてしまったのだ。第一、円が怪我の箇所を的確に当てたことにも驚いた。何せ円には怪我をしていたことさえ教えていなかったのだから。

空は思わず困惑した視線を良明へ投げた。彼は空同様の表情をして円を見下ろしている。

「円……これどうやったんだ？」

良明の声には何とか自分で理解しようと考え込む色が混じっていた。にこにここと笑う円へ、空も顔を向けた。

「自然の力を借りました。ちょっと疲れもなくなってるでしょ？」

円の言葉に、空と良明は顔を見合わせた。言われてみれば、先程に比べて身体が軽い。野宿をした時によくある、拭い切れずに残った疲労が殆どなくなっている。

二人して黙り込んでいると、円は慌てて話し出した。

「ごめんね。説明もなしにいきなりこんなことされたら、驚くよね」

「いや、まあ、な」

「何が何だか」

空と良明が曖昧に返し、円は説明のために座り直して姿勢を正した。

「木や草、それから水とか、自然には治癒の力があるの。あまりに小さい力だから、人は気付かないけど。森や山で空気が濃く感じたことってない？」

少し考えてから空がコクと頷く。

「それが自然の力。病気で静養するなら自然のあるところがいいっていうのも、そのせいなんだ」

「……何で円がそんなこと知ってたんだ」

自ずと空は不審がる口調になった。自分よりも幼い、小さな子供の口から出てくるにしては難しい内容だった。

空の問いに、円はにこりと微笑む。その笑顔は、不自然に思える程に落ち着いている。

「太古から、人は恵みを受け、自然は崇められて互いが尊重し合うことで共存が成り立ってきました。その均衡が崩れないようにするため、わたし達が調律しているのです」

円は小さな両手で、乳白色の石を握り締めた。

「人と自然の間で調和を築くのが、わたし達の役目」

空はポカンと開いていた口を慌てて閉じた。円の話は現実離れしているようで、それでも自分自身何度も経験してきたことのような、そんな感覚を引き起こした。その時不意に自身の影が動いた気がして、空は微かに肩を震わせた。小さな恐怖が胸の中で生まれたことに気づき、空はそれを押し殺した。何に対しての恐怖だったのかは空自身、分かっている。

無意識に顔をしかめていると、急に円がはにかんだように笑った。

「ってというのは母上の受け売りなんだけどねー」

更に明るい声で笑い飛ばす円を見て、空も良明も脱力感を覚えた。

「要はわたしにはそういう力があるってこと。自然の力を引き出して人に与えることができるし……逆に人の命を奪うこともできる」

「……そういう怖いことあっさり言うんじゃないねえ」

気分が悪くなったように小さく呟く空の傍らで、良明は微かに笑っていた。

時に荘厳な雰囲気をもと、時に幼くなる円を、空達は自然と超越した存在なのだと認識して、そして不思議とすんなり受け入れることができた。空は自分自身が少し異質故に多少のことには動じな

くなっていたから、円という存在も認められた。しかしどこからどう見ても普通の侍の良明が、何故驚いた風も見せずに笑っているのだろう。

空がチラと良明を見上げると、彼は怪訝そうに視線を合わせた。急に円が真顔になり、探るように空の目を覗き込んでくる。そのまま暫く考えた末、円はゆっくり口を開いた。

「……さっき怪我を治した時もおかしいと思ったんだけど、空ってもしかして」

円の続きの言葉は良明は聞くことは出来なかった。空の手が円の口を塞いだからだ。円は苦しそうにもがいている。良明は首を傾げながら二人の様子を見ていた。

「どうした？」

「えっ！ あ、いや、何でもねえんだ」

振り返った空の顔にはあからさまに焦燥が浮かんでいる。それを隠すかのように、空はまた円へ振り返り顔を近付けた。

良明は僅かに眉をひそめた。

「いいか、何も言うなよ」

そう釘を打ってから空は手を外した。解放された円は一息入れ、空を見上げて首を傾げた。

「隠してるの？」

「……そんなんじゃないよ」

弱々しく否定した空だったが、動揺は隠し切れていなかった。円の術を見た時、自分の異質さを改めて実感させられた。自分はただの人だと何度言い聞かせても、抱えている存在のお陰で自分が何者なのか分からなくなる。

満ちていく月が空なら、欠けていく月はそいつだ。陰と陽の関係が、幼い頃から同じ身体に共にある。

円が静かに告げた。

「隠してて正解だよ、あまり外に出すものじゃない」

「え？」

「同じ類のを知ってるから、何となく分かるんだ。わたしと似ていて、極端に違う」

「……円は、これが何なのか分かるのか？」

胸に小さな希望が生まれた気がした。空は思わず円の肩を掴んだ。しかし、円は微かに首を横に振った。

「ごめんなさい、はっきりは分からない。けど」

「けど？」

空は肩を落としかけて、慌てて持ち直した。

「母上なら分かるかもしれない」



「母上？」

「うん、すごいんだよ母上。何でも知ってる」

母の話をする円は、見た目相応の無邪気さが溢れていた。空は急ぎきって尋ねた。

「円の母親に、うちも会えないか？」

「うーん、少し難しいかもしれない。わたしの家、結界が張ってあって簡単には出入りできないんだ」

円が申し訳なさそうに身体をすくめた。

「そっか……」

空が僅かに俯くと、良明が静かに声を掛けた。

「なあ、話が全然見えないんだけど」

「うっ……それは……夜になれば分かる。たぶん」

「たぶんってなんだよ。おれにも害が及ぶことなのか？」

「それは……そうなるかもしれない。たぶん」

どの問いに対しても空は曖昧な返事しかしなかった。

空が隠し事をしているのは一目で分かる。だがその隠し事が何なのか、数日共に行動していても良明には到底理解できるものではな

かった。それぐらい、そのことに関して空は無言を貫いていた。

良明自身は詮索するのは好きでなかったし、空が伝えたくないことを無理に聞く必要もないと思っている。それに夜になれば分かる。彼女は言ったのだ。待つくらいならできる。

「まあいいや、その内分かるなら。話はこれぐらいにして、そろそろ行くぞ。明るい内に町に入っておきたい」

そう言って良明は立ち上がり、円を見下ろした。

「円はどうする？ 何なら送っていくけど」

「本当に？ じゃあ江戸まで一緒に行ってほしいな」

円が嬉しそうに笑った。

「なんだ、ちょうどよかったな。おれらもそこに行くつもりだったんだ」

良明があまりに自然に返したものだから、空はそのまま聞き流すところだった。彼の言ったことは聞き捨てならず、空は眉をひそめた。

「いつ江戸に行くって決まったんだ」

「言ってなかったっけ」

「聞いてない！」

「じゃあ今言う。江戸に向かう」

あつさりと言明が言い、その飄々とした様に空は無性に腹が立った。何故行き先を一人で、しかも勝手に決めるのか。それでは共に行動する意味がないではないか。

空が無言で怒りの抗議をしていると、言明はやれやれと頭を掻いた。

「ここらに来てから気付いたんだよ、このまま行けばもうすぐ武蔵に入る。だから、江戸に行っておこうと思って」

「ふーん」

空は頬を膨らませたまま呟いた。

「何だその不服そうな顔は。江戸はおれの生まれ故郷だ。二年帰ってなかったから寄りたくなっただよ」

「ふーん」と空はまた呟いた。

江戸に興味がない訳でもない。空自身は江戸を見たことがなかった。言明の故郷だということにも惹かれる。それに今や天下人となった徳川の本拠地を見てみたいという気持ちも少なからずあった。ただ言明が何も告げずに行き先を決めたことが不満だけだった。不意に言明が小首を傾げる。

「空が行きたいところあるなら、そっち行くけど」

「……ない」

「だよな」

良明がケラケラ笑うのを、空は睨み上げた。その傍らで、円が面白いものを見るような目で二人を交互に眺めていた。

一、遠い記憶 (4)

武蔵で初めての町に入った時には既に昼を回り、日は傾き始めていた。町と言っても小さな所のようで、民家が軒を連ねてはいるが人通りは至極まばらである。

大通りから別れた暗い小道に入ったところに三人はいた。空と良明、それから円(つぶら)は家屋の影から、店に入っていく男を覗き見た。足元にしゃがんでいた円が慌てて二人へ振り返る。

「あれ何のお店かなあ」

「どう考えても質屋だろ」

空が平然と答えると、円が仰天した声を上げた。

「ええっ、売っちゃうってこと？」

「そりゃ盗んだら売るって。うちだってそうする」

「えーっ」

円が悲鳴のような声を出し、空は思わず耳を塞いだ。

「そんなの困るー！」

「お前が盗まれるのが悪い。何ですぐ気付かなかったんだよ」

「だってぶつかったただけだったから……」

ムスツとして円は両膝を抱えた。

先程、円の乳白色の石が盗まれた。それはほんの一瞬の出来事で、男とぶつかり、暫くしてやっと首から石がなくなっているのに気付いた。

あの石は円が円であるための証のようなもので、あれがなければ能力も半減してしまう。それに母から授かった大切な石なのだ。無くしたと分かれば、母はきつと悲しむ。

拗ねた様子の円を見下ろして空がため息を吐いていると、良明が前方を指差した。

「出てきた」

「え、もう？」

空はまた店へと目をやった。店から出てきた先程の男が気落ちした様子で店の暖簾をチラと見上げ、そして片手を握り締めて歩き去るうとしていた。成程、と思いながら空は円に視線を移した。

「よかったな円、売れなかったみてえだ」

「ホントに？」

円が顔を輝かせて振り返った。空も笑って頷く。

「ああ、うちが取り返してきてやるよ」

そう言って駆け出した空の背中を、良明はため息混じりに見送った。安堵しながら彼女を見送っていた円は不思議そうに彼を見上げた。

「どうしたの？」

「いや、空だとガキ扱いされるのがオチなんじゃないかと思って。おれ達もついてこう」

唐突に歩き出した良明を、円は慌てて追いかけた。

男は橋の欄干に寄りかかって頼杖をついていた。彼に近付き、空は自身の腰に手を当てた。

「おい、オッサン」

「あ？」

無気力に振り向く男を、更に睨み上げる。

「あんたが盗んだ石、うちの連れの物なんだけど。返せよ、どうせ売れなかつたんだろ」

「ああ、これが」

男は手にしていた石をプラプラと揺らした。

「綺麗だからいくらか金になるかと思っただが……価値はそこら辺の石ころと大差ないらしい」

「お前みたいなのがその価値なんて分かるわけねえだろ」

「……言葉遣いには気をつけるよ、ガキが」

急に男の声が低くなり、空は内心怯んだ。数年前まで一緒に暮らしていた男が完全に切れた時のことを何故か思い出し、背筋が寒くなった。

気を取り直して言い返そうと口を開いた時、急に肩を叩かれて空はそちらに顔を向けた。良明が呆れた顔をして立っている。

「こつなると思った」

「どつという意味だ？」

空は眉を寄せて尋ねたが、良明は何も答えずに男へ視線を移した。

「それ、こいつの親の形見なんだ。返してくれないか」

良明の腰にしがみついて顔を覗かせる円の頭を、良明はぐいぐいと押さえるように撫でた。男は品定するように良明と円を交互に眺め、暫くしてから口を開いた。

「金ならん物を持ってても仕方ねえしな」

そう言つて、男は良明に石を投げた。それを片手で受け取り、良明は苦笑した。

「悪いな、金にならなくて」

「ふん」と鼻を鳴らし、男は背を向けて去っていった。



(何か同じ匂いがするな)

遠ざかる男の背中を見ながら、良明はこそりと思った。彼も元は武士なのではなからうか。何があつて町人になつたのかは知らないが、身のこなしも仕官当時の癖が抜けきれていないように思えた。それに気付く自分も、抜けきれていないのだな、と良明は内心ため息を吐いた。故郷を出て二年、その年月は人を変えるには長いようで短いものだ。

男を見送り、良明は円の手に石を載せてやつた。円は嬉しそうにそれを握り締めた。

「ありがとう　　あ」

急に、円は眉をひそめ、暫く考え込んだ。空も良明も、不思議に思いながら円を見つめた。

「さっきの人、追いかけてきます」

やはり唐突に円が言い、男が向かった先へ駆けて行つた。

「あ、おい」

良明が呼び止めたが、円は振り向きもせずはずんずんと突き進んでいく。傍らで空が呆然と呟いた。

「何なんだあいつ」

「さあ」

二人は首を傾げ合い、円の後を追った。

六間先にある裏店への小道を見つけ、空と良明はそこに踏み入った。円の緋の袴がこの辺りで最後に見えたので、ここに入ったのだらうと推測した。

その裏店は古びてはいるものの人は多く、井戸端会議をする数人の女房の周りを小さな子供が遊び回り、にぎやかだった。少しの懐かしさと居心地悪さを感じながら空がきよるきよる見渡していると、良明が隣から離れ女房達に近寄っていった。

彼女達に話しかける良明の背を、ポツンと佇んだまま空は眺めていた。何かを尋ねている彼を待っている間、手持無沙汰なままぼんやりしていると急に袖を引っ張られ、空は驚き振り返った。そこには円よりももっと幼い少女の姿があった。彼女は不思議そうな表情で空を見上げている。

空は少し困惑しながら腰を折り、少女と目の高さを合わせた。

「お前この子か？」

「るり」

小さな声で彼女が答え、それが名前なのだと空は解釈した。

「おねえちゃん、だあれ？」

るりに尋ねられ、空は腰を伸ばしてから答える。

「うちは空だよ。るり、赤い袴着た子、見てない？」

空が首を傾げると、るりは「あっち」と言っただけ空の後ろを指差した。るりの言う方向へ振り返ると、ちょうど良明がこちらへ戻ってくるどころだった。

「円ここに来たって。さっきの男のこともしも少し聞いた……って何だその子」

良明がおかしそうに、空の袖を掴んでいるるりを見下ろした。空も戸惑いながらるりを見つめた。

「いや、何故か離してくれなくて」

「気に入られたわけか……空が小さいから、何か通じるものを感じたんだろ」

「小さい言うな！」

ケラケラ笑う良明を、空は睨み上げた。

「それでっ、円は」

「ああ、とりあえず行ってみよう」

良明は空を促して歩き始めた。彼の後を、るりに袖を掴まれたままの空が追った。

格子窓から、円は家の中を覗いていた。そこら辺にあった桶を踏み台にはいるが、背伸びをして漸く目が格子の高さに届く。

家の中には、先程の男と他にもう一人、部屋に敷いた布団に座る少女がいた。誰だろうと思いつながらうーんと唸っていると、急に身体が浮き、桶から足が離れた。

「わあっ」

「円、一人で突っ走るのやめろ」

振り返ると、良明の顔がすぐ側にあった。彼が円の身体を持ち上げている。

「なんだ、良明かあ。どうしたの」

円がにこにここと笑いかける。

「どうしたの、じゃねえよ。何見てたんだ」

良明の隣で空は怒ったように言った。彼女とその傍らのりを見下ろし、円が少し首を傾げる。

「その子は？」

「知らん」

空がそっけなく返した時、急に円が覗いていた家の戸がするすると開いた。もしや先程の男が出てくるのではと三人三様に慌てたが、隙間から顔を覗かせたのは少女だった。淡い驚色の寝着のような薄手の着物を着て、肌は青ざめて見える程に白い。

「あのう……うちに何か用でしょうか」

少女はおどおどとした様子で首を傾げ、三人の顔を見つめた後、るりの姿を捉えた途端目を丸くした。

「るり、どこ行ってたの」

「じんじゃ」

るりが空の傍らを離れ、少女の腰にしがみついた。

「神社……そっか」

少女は優しく微笑み、しゃがんでるりの目の高さに合わせて。

「お姉ちゃんは大丈夫。父さんがご飯作ってるから、るり手伝ってあげて」

そう言って、頭を撫でてやると、るりは頷いて家の中へ駆けて行った。彼女を見送ってから空が訊いた。

「あんた、るりの姉ちゃんか」

「はい、なえと言います」

なえと名乗った齡十四、五ぐらいの少女は、不意に眉を曇らせる。

「……るりか父が、何かしたのですか」

「ううん、良いんだ、被害はなかったから。それよりなえさん」

答えたのは円だった。空も良明も内心驚き、怪訝に思っていた。さつきから円の言動が唐突で、それに何を考えているのか二人には分からない。

円はなえの前に立ち、両手を差し出した。なえは不思議そうに瞬きを繰り返して、円を見つめる。

「ちょっと手を貸してください」

「手を？」

首を傾げながらなえは円の手に自分の手を重ねた。彼女の手を掴み、円は目を閉じる。途端、突風が吹き抜け、戸をガタガタ鳴らし、円が載っていた桶を吹き飛ばした。円以外の三人は思わず声を上げた。

風が止んだ頃には円は手を離して身体の後ろに組み、にこりと笑っていた。

「へへ、ありがとう。それじゃあ、わたし達、行くね」

「う、うん」

なえはきよとんととして、円の勢いに合わせて頷いた。踵を返す円の後を、空と良明は再び怪訝に思いながらついて行った。

裏店の小道から大通りへ出た三人は一斉に一息入れた。そして空が円へと振り返る。

「で、何だったんだ」

「あー、ごめんなさい。説明しなくて」

円が申し訳なさそうにちろと舌をだす。空はやれやれと腰に手を当てた。

「ホントにな。説明よりもまず行動、ってのどうかと思うぞ」

「それはお前もじゃないか。考えもなしに即行動、円より悪い」

「うるせえ」

呆れたように言う良明の腕を空は殴った。傍らで円が笑い声を上げ、そして浮いた涙を拭いながら話し始めた。

「あのね、石が返ってきた時、あの男の人の感情が流れてきたんだ」

「感情が？」

また意味の分からないことを言い始めた、と空が眉をひそめる。

「感情というか、わたしが感じられるのは人の病だから、あの人の心の病、って表現の方が合ってるかな」

「心の病……なえって娘のことか」

良明が考え込みながら答え、円はまた頷いた。訳が分からず、空は怪訝そうに首を傾げて二人を見つめた。

「どづいつことだ？」

「あの人、六郎って言うんだけど……娘のなえが大病らしいんだ。医者もお手上げの、不治の病。このままいくと死ぬらしい」

「うそ」

空は驚愕した。

確かになえは顔色が悪かった。だが立って話も出来たし、優しく笑ってもいた。その彼女が死に向かっているとは予想だにできなかった。

「なえさんを治してやりたくて、六郎さんは悩んでた。心が病んでしまつくらい」

円が深刻そうに付け足す。

「このままなえさんが亡くなったら、六郎さんも、きっと危つくなる。そしたらるりちゃんも危ない」

「……母親はいないのか」

「るりを産んで亡くなった、って」

良明が声をひそめて言い、空は僅かに顔をしかめた。

「わたし、なえさんを治す」

胸の前で両手を握り締め、円が言った。それを聞いた空は眉を上げ、少し声を大きくした。



「何で円がそんなことしなきゃならねえんだ。その六郎ってやつは、お前から石を盗んだんだぞ」

「ちゃんと返ってきたもん。それに六郎さんが石を盗んだのは、なえさんの治療代が欲しかったからだって、空にも分かってるでしょ」

円も負けじと空を睨んだ。空は額に手を当て、首を振った。

「やめとけって。お前の力は人に見せるものじゃない。うちにそう言ったのは円だろ」

「そうだけど……」

円は一瞬言葉を詰まらせ、それでもなお口を開く。

「さっきなえさんの手を触って、病気の具合が分かったの。今なら少しの時間で治せると思うんだ」

「あんな」

「空はわたしが治せるのを知ってて、なえさん見放すの」

円の挑むような視線に、今度は空が言葉を詰まらせる番だった。すると急に隣で良明が笑い声を上げた。

「そこまで言われたら、空が引くしかねえと思っけど」

「はあー？」

空は不服そうに良明を見上げた。

「おれは円の意見に賛成。円が六郎に石を盗まれたことも、六郎の娘が病気なものも、偶然だけど偶然じゃない気がする」

「んんー？」

良明の言っていることは解釈できるのだが、何かが胸につつかえているようで上手く飲み込めない。それに簡単に言いくるめられた気がして、空は片手でぐしゃぐしゃと頭を搔いた。

一方で円は顔を輝かせ、有難そうに良明を見上げた。

「二対一で空の負けだね」

「負けて何だ、負けて」

空が憤然と言つものにも構わず、円は良明の袖を引っ張る。

「どうやって治すか考えよう。わたし町の中じゃあまり力発揮できないから」

「ああ、森の中とかがいいんだっけ」

自然の力を引き出して人間に与える、だったか。朝の話思い返しながら良明が言つと、円が頷いた。

「神社があるみたいだから、とりあえずそこに行こう」

「神社？ どこにあるんだ」

「神社は大体、山の麓に建てられるの。だから、たぶんあっち」

円が遠くに見える山並みを指差した。それを眺め、良明は頭を掻く。

「じゃあ今日はそこに寝泊まりさせてもらうか、宿代も浮くし。空もそれでいい……ってめちゃくちゃ拗ねてんな」

振り返ると、最大限まで頬を膨らませた空の顔があり、良明は思わず苦笑した。

「お前の言い分はわからないでもねえよ。何のために治してやるのか、とか。初対面でそこまでする必要があるのか、とか。でも考え出すときりがない」

そう言いながら良明は腕組みする。

「おれと空だけだったら、なえにも会わなかったらどうなる。そんなえは病で死ぬだけだ。だから円がここにいるのも、運命なんだと思う」

「運命とか……くせえ話」

空が呆れたように言うと良明は愉快そうに笑った。

「ははは、おれもそう思う」

彼の気楽な様子に脱力感を覚えた空は、大袈裟に肩を落とした。そして観念したように口を開いた。

「……わかった、協力するよ。ま、うちも宿じゃない方が少しありがたいからな、今日は」

「ああ……」

またも今朝のことを思い返しながら、良明は中途半端に頷いた。空に何かあるのか未だ知らないため、何と返せばいいのかわからない。暫く彼女を見つめた後、良明は右手を伸ばして彼女の頭をぽんぽんと撫でた。

「……何だよ」

空が眉をつり上げたのを見て、良明は肩をすくめるだけで特に何も言わなかった。そして円に視線を移す。

「円、神社の場所、分かるんだろ？」

「うん、こつちだよ」

円が意気揚々と頷き、良明の袖を引っ張って歩き出した。

二人の少し後ろを歩きながら、空は浅くため息を吐いた。さっき良明に頭を撫でられたのは、氣遣ってくれての行為なのだろう。何も訊かれないのは有難かった。空自身、訊かれてもどう説明すればいいのか分からなかった。説明できたところで良明が信じてくれるかさえ分からない。だから実際に見てもらおう方が早いのだ。

気味悪がられてもしょうがないことだと承知している。拒絶さ

れたその時は連れ立って行動するのを止めるだけだ。だけど、良明は刃を受け入れられたのだから、もしかすると自分も受け入れてもらえるかもしれない。

空は独りよがりな淡い期待を抱いていた。

\* \* \* \* \*

チリン、と鈴が鳴った。

発砲音が絶えず鳴り響き、怒号が乱れ飛ぶ。戦の口火は切られ、戦場は一進一退を繰り返していた。騒然とした中で、その小さな鈴の音はやけに耳に響いた。良明は足を止めて振り返り、濃い霧の中で目を凝らす。

二人の男の影があり、互いに向き合っているようだった。霧が深く、何をしているのかよく見えない。良明は怪訝に思いながら、霧をかいくぐるように彼らに近寄る。

「宗佑さん？ ……一陽」

彼らまであと数歩というところで良明は足を止めた。状況をすぐには理解できなかった。

一陽（かずひ）の刀が、宗佑（そうすけ）の胸を貫いている。

どういふことだ。何が起っているのだ。

答えのない問いが頭の中で渦を巻く。

愕然と二人を見つめっていると、宗佑の震える手が一陽の肩を掴み、小さく何かを呟いたようだった。すると一陽が身を引き、宗佑から刀を抜いた。血を吐きながら宗佑がその場にドツと崩れ落ちる。血に濡れた抜き身の刀を身体の横で握り締め、一陽は横たわる宗佑を見下ろしていた。

何故こんなことになった。

良明は既に考える余裕すらなくなっていた。

呆然としていると、突然一陽が振り返り目が合った。彼の黒い瞳と冷たい表情に、背筋が寒くなる。良明は咄嗟に、自身の腰の刀に手を伸ばしていた。

自分が最も慕う人を、この男は殺した。許せなかった。だが、この刀を抜いて彼を斬る覚悟も、良明には備わっていなかった。一陽もまた、良明が幼き頃から面倒を見てくれた、慕っている人だったから。戸惑いと躊躇にさいなまれ、微かに手が震える。

刀を抜こうか抜かまいか迷っていると、突然小さな声がした。

「良明」

宗佑の声だった。慌てて目を向けると、彼はうつ伏せのままこちらを手招いている。宗佑はまだ息をしていたのだ。何故既に死んだと勘違いしていたのだろう。手当てをすれば助かるかもしれない。

良明は駆け寄って宗佑の傍らに膝をつき、彼を仰向けにして顔を覗き込んだ。

「宗佑さん」

「……何だその顔。戦はまだ続いてるんだぞ」

宗佑が渴いた笑い声を上げる。良明はかぶりを振り、急ぎきつたように話した。

「一旦陣に戻りましょう、早く手当てを」

「いや、いい」

ゆっくり首を振って、宗佑は未だ傍らに立っている一陽に目を向けた。一陽は相変わらず無表情だった。

「……悪いな、一陽。お前には迷惑をかけた」

何故宗佑が詫びているのか良明には理解できず、一陽を見上げるしかなかった。一陽は暫く目を閉じてから、良明に睨むような視線をやった。

「良明、恨むなら俺を恨めよ。相手なら、いつでもしてやる」

「……どういふことだ」

良明が尋ねたにも関わらず、一陽は身体の向きを変えるなり足早に去っていった。

「一陽！」

大声で呼び止めても、彼は一度も振り返ることなく霧の中に姿を消した。

「……良明、いいから」

仰向けになったままの宗佑に腕を掴まれ、良明は驚き振り返ってハツとした。宗佑の顔は青ざめ、口端からは血が垂れ、今にも目を閉じてしまいそうだった。

宗佑が死んでしまう。そう考えるだけで全身の血がざっと音を立って引いていく。

「宗佑さん、戻りましょう。手当てしなきゃ」

再度促したが宗佑は首を左右に振るだけだった。

「何で」と叫びそうになった時、宗佑が良明の頭を掴んで胸に引き寄せた。鎧と血の匂いが混じり、鼻を突く。

「……一度しか言わないからよく聞けよ」

荒い呼吸をしながら宗佑が話し出す。良明はギリと歯を喰い縛り、かぶりを振った。何も聞きたくなかった。

「いいから聞けて……一陽のことは恨むなよ。恨むのは筋違いだ」

「どつという意味……」

良明は顔を上げようとしたが、宗佑の手に阻まれ、彼の胸に額を付けたまま次の言葉を待った。

「良明はもう徳川に戻るな……俺も一陽もいないんじゃ、お前の身の保証はできない」



「……でも……おれは」

良明が話し出そうとするのを、宗佑は軽く彼の頭を叩いて制した。

一、遠い記憶 (5)

「はは……もう力も入らん……」

宗佑は長く息を吐き出し、目を閉じた。

「……出陣の前に言ったこと、覚えてるな？」

「はい」と良明が掠れた声で頷くと、宗佑が短く笑った。

「ならいい……お前に言っておけば、安心して死ねる」

息を引き取った宗佑の手をゆっくりと外した。

良明はその場に力なく座り込んだまま、曇った空をずっと眺めていた。

\* \* \* \* \*

目を開いた先は真っ暗だった。自分がいる場所が何処なのか一瞬分からなかった。天井を見つめていて、漸く神社の堂の中だと思いつく。

混乱する頭に手を当て、良明は長く息を吐き出した。動悸が煩い

上に、全身から冷や汗が吹き出ている。ここまで鮮明で、感触や匂いまで蘇るような夢は初めてだった。江戸が近いからだろうか。そう考えて、少し自分に嫌気がさした。

(クソ……)

良明は片手で額を拭い、起き上がって考えを飛ばすように頭を振る。空の声があったのはその時だった。

「だいぶ唸されていたけど、大丈夫？」

「いや……変な夢見てただけ……だ……」

返事をしながら、良明は空の声音に違和感を覚えた。振り返ると、姿勢よく正座する空の姿があった。

空であるはずなのに、全く別の誰かがそこにいるようだ。青白い光をまとい、彼女のいる所だけが仄かに明るい。それによく見れば、彼女の瞳は水をたたえたような青さをしている。

急に彼女がにこりと笑み、硬直していた良明は自ずと背筋を凍らせた。ただの笑顔が、何故か恐ろしかった。

良明は数回深呼吸をしてから声をしぼり出した。

「……お前、誰だ」

「あらまあ、一目見ただけで分かってくれるなんて。政長よりは素質があるみたいね」

そう言って、空の中の誰かは口元を押さえて上品に笑う。姿形は空そのものだから、仕草一つ一つが奇妙に思えた。今まで見ていた夢も相まって、良明の混乱は増していくばかりだ。

「……もしかして……空が言ってたことってこれか」

彼女の異変を見ていて、唐突に合点が行った。空がひた隠しする理由も何となく分かる気がする。クスクスと笑い続ける彼女が話す。

「隠す必要のないのにね。この子、私のことを相当嫌ってるの」

そう言っただけで彼女は残念そうに眉を下げる。良明は気を取り直して彼女に向かい合い、どっしりとあぐらをかいた。

「あんた、何なんだ？」

「何、と聞かれてもねえ……私のことは『うみ』と呼んでちょうだい」

「海？」

「ええ、空の反対で海。勝手に付けられた名前だけど、私気に入ってるの」

海が嬉しそうにふふと微笑む。

「貴方のことは良明でいいかしら？ それとも、よっしー？」

「……何でそれを」

良明は怪訝そうに眉を寄せた。

「私が何も知らないでも思っただけ？ 空を通して全て見ているわ」

胸に手を当てて海がにこりと微笑む。

「ふーん」と呟き、良明は膝の上に頼杖をついた。二重人格とは訳が違うように思えた。別の誰かが空の中にいる。そう考えた方がしっくりくるぐらい、海と空はかけ離れている。まず光を身にまとうこと自体、異質だ。人ではない何かがそこにいる。

良明が探るようにじっと見つめっていると、海は小首を傾げた。

「貴方、気味悪がったりしないのね」

「ああ……何でだろうな。おれこういうのに慣れてるんだよ。自分でも不思議に思ってる」

「へえ。でもたまにいるわよね、そういう人間」

「海は人間じゃないのか？」

核心を突くようなその問いに、海は微笑むだけで答えは返さなかった。代わりに良明に詰め寄り、顔を覗き込む。青い瞳が目前まで迫り、良明は僅かに身を引いた。

「貴方に頼みがあるの」

「頼み？」

「そう、頼まれてくれるかしら」

更には手を取られ、両手で握り締められる。良明は困ったように一瞬宙を仰いだ。まだ得体の知れぬ相手だ。迂濶に返答すれば自身

に何が及ぶか分からない。

海の期待のこもる視線を受けながら暫く考え、良明はゆっくり口を開いた。

「……内容にもよるけど」

そう呟いた時、海の後ろの暗闇から小さな白い手が伸びてきて良明は目を見張った。その小さな手は海の手を覆う。

「引きなさい」

次いで円の声がした。

海が目が隠れたことに良明は内心ホツとしていた。あの青い瞳は透き通りすぎていて、気を抜いたら呑み込まれ、逆らうことが出来なくなりそうだった。

海がため息を吐いて良明の手を離す。

「なーんだ、あなた」

「何をしたいのか知らないけど、わたしの前で悪さはさせない。引きなさい」

有無を言わさぬ口調で円が再度命じると、海がやれやれと肩をすくめる。

「残念ね。まあ、今日のところは引っ込んであげる」

その言葉の後すぐ、フツと青白い光が消え、空の身体が前のめりに傾いた。

「わわっ、わっ」

支えようとした円も空の重みに堪えきれずに引っ張られる。重な  
って倒れてきた二人を良明は慌てて受け止めた。

「大丈夫か」

「あたたた、ごめんね」

苦笑しながら返事をしたのは円だった。円は即座に起き上がったものの、空は未だ腕の中でぐったりとしている。良明は不審に思い、彼女を仰向けにして頬を軽く叩いた。

「おい、空」

「大丈夫だよ、寝てるだけだから」

その場に正座しながら円が言い、良明は顔を上げた。漸く、円の傍らになえが佇んでいるのに気付いた。彼女は不安そうな面持ちで空を見下ろしている。

「あの……空さん、どうしたんですか」

「……さあな……おれにも分からん」

軽く肩をすくめ、良明は空に目をやった。そしてゆっくり床に横たえてやる。起きる気配はなさそうだ。

「なえの治療……でいいのかわからんが、終わったのか？」

「うん、無事にね」

そう言っつて、円がなえに目配せする。急に円と目が合い、なえは戸惑ったようだった。そしておずおずと話し出す。

「あの……私、本当に治ったのでしょうか」

病気を治してやると夜中に家を連れ出されたのだが、何をしたらかと言っつと、明け方の今まで外で円と向き合っただけなのだ。

そりゃあ疑うだろうな。そう思いながら良明は苦笑した。何せ良明自身も最初は半信半疑だったのだから。

「何か、身体に変わったことはないか？」

「身体に、ですか」

なえは困惑しながら変化を捉えようとしたが、それらしいのが見付からず首を傾げた。そして暫くうんうん唸っつてから、ハツと何かを思い出したのか、急に手で耳の後ろを探る。途端、彼女の目が見開かれた。

良明は「何かあつた？」と優しく笑い、首を傾げた。なえは興奮したように勢いよく何度も頷く。

「あのっ、ここっ、耳の後ろにしこりがあつたんです……それが……」

「なくなつた」

「は、はい」



感極まったのか、彼女は涙ぐんだ。

「これが原因だと言われてました……治ることはないと言われて、諦めるしかなくて……」

なえは鼻をすすりながら円に目を向ける。つられるように良明もそちらを見ると、いつの間にか円は空に寄り添って寝息を立てていた。夜通し術を使って疲れたのだろう。小さな二人がすやすやと眠る様子はとても無邪気で、少しばかり口元が緩んでしまう。

「何者なんでしょう、この子」

不意になえが呟き、良明は暫く考え込んだ。

一日、何も考えなかった訳ではない。円には不思議な能力があり、空に至っては先程少し事のあらましが分かったぐらいで、考えても謎は深まるだけだった。予想の範疇だったが、良明はポツリと呟いた。

「……神の類、かな」

「神様、ですか」

なえが怪しむような視線を良明に投げる。

「あ、疑ったな。こんなことできるやつなんて、その道に精通してるか、元からできるかのどっちかだろ」

少しぶつきらぼうになりながら、良明は腰を上げた。自分だって

信じ切れている訳ではない。しかし、「神の類」と考えるのはごく自然のことように思えた。それぐらい、円は卓越した存在だった。こちらを見上げ、なえが首を傾げる。

「……それが正しいのか、私にはわかりません。病気が本当に治ったかも、まだ信じられていませんから」

「じゃあ、朝飯食ったら、医者にでも診てもらおうだな」

そう言って、良明は僅かに苦笑する。「家まで送るよ」と言い、戸口へ振り返って漸く、堂の中に朝日が差し込んでいるのに気付いた。

また一日が始まる。

良明は吸い寄せられるように戸へ近付いた。なえの病気はきつと完治していると、妙に確信していた。しかし、なえの病気を治したことは果たしてよかったことなのか。良明達がなえとその家族の人生を変えてしまったのだ。ただならぬ事をしてしまった気がする。そう考えて良明は僅かに息を詰まらせた。

悪い事をした訳じゃない、と自分に言い聞かせながら、良明は戸を開け朝日の降り注ぐ中へ身を投じた。

重い臉を上げ、空はきよると目を動かした。

(……あれ)

光が差し込む堂の中に良明の姿が見えず、空は頭を持ち上げた。

円が隣で寝息を立てている。

(どこ行っただらろ)

そう考えながら身体を起こして大きく伸びをする。

「んんーっ……っいつて……っ」

急に刺すような鋭い痛みが頭に走り、顔をしかめた。

「……くっそ、やっぱり出てきたな」

頭を押さえて低く呟き、無意識に歯を食い縛る。海が出た日の朝、目覚めると必ずと言っていいほど頭痛や腹痛が起こる。しかも激痛なのだ。数ある海が嫌いな理由の一つにこれが入る。しばらく我慢すれば治まるけれど、やはり厄介なものであることに変わりはない。なかつた。

痛む頭で、空は良明のことを考えた。海が出てきたということは、良明も彼女を見たはずだ。

海についてどう思ったのだろう。気味悪がったりしたのだろうか。何故今ここにいないのだろう。とりとめなく疑問を浮かべたが、答えは返ってこない。

ため息を吐いて目を閉じた時、急に頭を撫でられ空は顔を上げた。円が心配そうな顔で空の頭に小さな手を添えている。

(いつの間)

内心空が驚いていると、円が口を開く。

「水の守、風の守、あめつち渡りて」

大きな声ではないはずが、円の声は耳の奥、いや身体中で大きく反響するようだった。

「よの玉、ひの玉、流るるままに」

円の胸元にある石が、淡い柔らかな光を放っている。惹かれるようにそれを見つめていると、急に身体の緊張がほぐれ、頭痛が和らいだ。空はふっと力を抜いた。

石が光るのを止めるのと同時に、円は手を下ろして穏やかに微笑む。

「大丈夫？」

「へ？ ……あ、ああ。大丈夫」

静まり返った石を名残惜しむように見つめていた空は、慌てて頷いた。不思議と身体が温かい。

「……今度は何やったんだ」

ぬくもった手を揉みながら尋ねると、円は無邪気に笑って言った。

「脈を整えただけだよ。頭痛くなるのはしょっちゅうなの？」

「ああ……子供のときからずっとだ。それで昔はよく泣いてたな」  
空は疲れたように肩をすくめる。

「そっか……でも血の巡りがよくなったから、しばらくは大丈夫だ  
と思っよ」

「え……海が出てきても？」

「うん」

円が頷いた時、戸が大きく開き、堂の中が眩しくなった。空は目を細めてそちらを見、良明の姿を捉えた途端、ほっと息を吐いた。彼は戸を開けたままこちらに近寄ってくる。

「起きてたのか。なえが握り飯作ってくれたぞ」

ほら、と竹の皮の包みを投げて渡す。そして二人の前に腰を下ろしてあぐらをかいた。何も言わずに包みを開ける良明を、空は静かに眺めていた。空の視線に気付いた彼は、握り飯を頬張りながら眉をひそめる。

「何だよ」

「……別に。なえは帰ったのか？」

尋ねながら空も包みを開き、綺麗に握られた三角を一つ掴む。

「ああ。病気も治ったみたいだしな」

「ふーん」と呟いて空が握り飯を一口食べた頃には、良明は既に一つを食べ終わっていた。その速さに内心呆気に取られながら、円に目をやった。円は包みを開かず、膝の上に置いたまま良明を興味深そうに眺めている。

「食べないのか？」

空が尋ねると、円はうつんと首を振った。

「これはここにお供えしようと思って。それにわたし、食べ物には制限があるから」

「えっ、米も？」

空も良明も驚いた顔をする。

「あ、違うよ、何でも食べられるんだけど、お供え物しか食べちゃダメって決まりがあってね」

円がわたたと両手を振って説明する一方で、空と良明は互いに顔を見合わせた。そして二人は怪訝そうに円へと振り向く。

「……それってただの盗み食いじゃん」

「ええっ？」

思ってもいなかった返答だったのか、円は仰天した。

「そうじゃなくてえ……わたし、家に奉納されたものしか食べられないの」

「奉納とか、城の子供じゃあるまい……身体が弱いのか？ そんな風には見えないけど」

空は一層不思議そうに首を捻る。

「そういうのでもないんだけどなあ」

弱り果て、円は身体をすくめた。

「まあわたしは食べなくても大丈夫だから」

「何で」

「何ででも」

「お前今説明放棄したろ」

空はムツと眉を上げた。

「だって空質問ばかりなんだもん」

「あーわかるわかる、たまに面倒臭くなるんだよなあ、疲れてる時とか」

円の返答に良明が相槌を打ち、空は唇を尖らした。

「何だよ、別にいいだろ質問の一つや二つ。心の狭いやつらだな」

「一つや二つで利いた例しがないけどな」

良明がやれやれと首を振る。そして急に何かを思い出したように顔を上げた。

「そつだ、お前の盗んだ金半分以上なえ達に渡したって言ったら切れ」

「はああああ!?!」

良明が言い切らぬ内に空は叫んでいた。

「ますよね」

「ごもつとも、と良明が頷く。怒りの余り腰を浮かせ、空は訳がわからないと、信じられないと言わんばかりの視線を彼に投げつけた。

「お、おおお前バカだろ！ 何で金まで置いてくんだよ!」

「何でと聞かれてもなあ、何ででも?」

「……うがーっ！ 腹立つ!」

良明の飄々とした様子を見て空は叫びながら自身の髪を掻きむしった。

「人が苦勞して手に入れた金を!」

「どうせ綺麗な金じゃねえんだからいいじゃん」

「そついう問題じゃねえ!」



ダンツと床を踏み鳴らすと埃が舞い上がった。良明も円も、握り飯を包みごとサツと持ち上げて埃から離す。

「金を渡した理由を聞かせてもらおう」

良明をギツと睨みながら、空は唸るように問いただした。何事もなかったかのようにのんびり握り飯を口に運んでいる彼が、怪訝そうに尋ね返す。

「逆にこっちが聞きてえよ、何でそんなに金に敵しいのか」

「そういう風に育てられたからだ。悪いか」

空はぶっきらぼうに言っつてフンと鼻を鳴らす。

「ふーん、政長つてやつに？」

良明の言葉に空はうるたえて一瞬閉口し、慌てて尋ねる。

「その名前、何で知って……」

良明は少し考えを巡らせ、肩をすくめながら口を開いた。

「海が言っつてたからな、何となく覚えてたんだ」

背筋が寒くなったような気がした。良明の口から「海」という言葉が出ただけだと言っつのに。やはり彼は海に会っつていたのだ。

空は俯き、座り直した。急に静かになっつた空を、良明は見つめていた。

暫く宙を睨んでから、空は重い口を開く。

「……どう思った」

「海のこと？」

空が小さく頷くと、良明は頭を掻いた。

「どう思ったかねえ、少ししか話してないしな……まあ妙な感じがしたぐらいかな」

うーん、と首を捻りながらも淡々と話す彼を、空はポカンとした表情で見つめ続けた。予想していた反応と全く違う。

不意に良明と視線が重なり、空はたじろいだ。

「厄介そうなの抱えてるなお前。いつからだ？」

「……それは……七つの時から」

視線を外して、空はぼつりぼつりと話し始める。

「育ての親が死んで、その……政長って人と行動始めてから出てきたんだ。それより前は出てなかったと思う……聞いたことなかったし」

「毎日？」

「いや、海が出てくるのには条件がある」

「へえ、どんな条件」

良明が真剣に聞いてくれるため、少し話しやすかった。何も喋らないが円が傍らにいても心強い。膝の上で手を握り締め、一呼吸入れてから更に続ける。

「満月の次の日から新月までの、うちが寝てる間だけ」

「月が欠けていく間、か」

空は頷き、何か考え込んでいる良明にチラと視線をやった。

「その間も、出てくるのは海の気分次第らしい。毎日だったり、そうでなかったり」

「……わかった。次に海が出てきたら色々聞いてみる」

良明が頷いてみせ、空はキョトンとして首を傾げた。

「その様子だと、海が出てくる間の記憶はないんだろ？ 後から聞かされたって話し方だったからな。それなら海に直接聞いた方がよさそうだ」

「なるほど」と空は思わず呟いた。

良明の言う通り、海が表に出ている間の記憶はなかった。以前の連れだった政長は海のことを度々話してくれたが、自身が毛嫌いしているせいもあって余り気に留めずにいた。だから今良明に何か海について尋ねられても答えられないのだ。

「さつさと食って行こう。今日たくさん歩いておけば、明日には江戸に着くだろ」

そう言って良明は握り飯に添えられていた漬物を口に放り込んだ。

海のことを気味悪く思った様子は彼には見られなかった。嫌われていない。それだけで心底ホツとしてしまふ。空は嬉しさを噛み締めるように、握り飯を頬張った。

握り飯を食べ終え、竹筒の水を飲もうとした時、堂の外で岩でも落ちたようなけたたましい音が鳴り響いた。空は身体を震わせ、良明は刀を取って素早く振り返り鯉口を切る。

「円様はここにいらっしやいますか!？」

開けつぱなしだった戸から大声と共に足を踏み入れたのは、黒の袴と袴を身に付け頭を剃り上げた山のような大男だった。神社にいるせいか、住職を思わせるその風貌に違和感を覚えた。何より彼の天井につかんとする身体の大きさに威圧される。

空が唾然として座り込んでいると、良明が背を向けたまま空の前までやって来た。そして少し緊張した声で話す。

「円の知り合いみたいだが……でけえな」

「あ、ああ……」

空は上擦った声で頷いた。

「斑！」

立ち上がった円が嬉しそうにぴょんと跳ね、斑（まだら）と呼ぶ大男に飛び付いた。

「よかったあ迎えに来てくれたの？ よくここがわかったね」

「ええ、ええ。ご無事で安心いたしました」

円の前に両膝をつき、斑は目を潤ませて直も続ける。

「数日前、崖から川に落ちそのまま流されていく円様を追いかけるも見失い、私川沿いを走って海まで出てしまいました。かろうじて円様の術の痕跡を見つけそこから北上して参ったのであります」

「ああ、そうなの？ ごめんね、手間かけちゃったね」

円がオロオロしながらなだめるように言うが、斑の口は止まらない。

「円様も術を使わなければならぬ事態になっていたと言うのに、何という失態でありましょうか円様を見失ってしまつとは…… この斑、日輪様に合わず顔がありません……！ ここは腹を切つて詫びるしか」

「わーわー！ 斑待って！」

どこからともなく刀を取り出す斑の腕を円は全力で押さえた。それでもこの体格差、敵う訳がない。

「斑は武士じゃなくてわたしのお付きでしょう！ 腹なんて切ったらわたしが許さないんだからね！」

小さな身体で大男を必死に押さえ込む円と、それに聞く耳持たずな斑を見つめていた空は、思わず呟いた。

「何だこれ」

会話を聞いて二人が主従のような関係だということは分かったのだが、何だか主従とは程遠いような、まさに「何だこれ」の状態にしか見えない。

空の呟きが聞こえたのか、斑が動きを止めて振り返った。目が合った瞬間、彼が鬼のような形相になり、ゆらりと立ち上がる。空も良明も息を飲んだ。

「何故ここに人間がおるのだ……貴様等、円様に何かしたのではないだろうか」

斑が怒鳴った途端、首を絞められたかのように息ができなくなった。

「……………っ!？」

首を押さえ息を吸おうとするも、苦しさが増すだけだった。円が斑を戒める声が聞こえるが、空には何と云っているのか分からない。一瞬にして感覚全てが遠くなったかのように。冷や汗と涙が浮き出る。

床に両手を付いて苦しさを耐えていると、不意に良明が抱えるように肩を引き寄せた。

一、遠い記憶 (6)

空は虚ろな目で彼を見上げた。良明には異変がなく、抜き身の竹光を右手に構えて斑を睨んでいる。そして刀を頭の高さまで上げ、一気に振り下ろす。風が吹き抜けたと思った次の瞬間、喉に空気の塊が入り、空は大きく咳き込んだ。

「ほう」

良明をまじまじと眺め、斑が感心したように顎を撫でる。そんな彼に円が怒鳴る。

「こら！ あの二人はわたしの命の恩人なんだよ！ 何てことするの！」

「何ですと！？」

斑が目をはみ剥いた。

「何と何と！ そうでありましたか……申し訳ござらん、私が早合点してしまっただばかりに」

「お許しください」と斑は慌ててその場に正座し、深々と頭を下げた。

むせていた空は口を拭って床に額を擦りつける彼を睨んだ。

「とんだ早合点だよ……ゲホッ……いい迷惑だ」

「大丈夫か？」

良明に顔を覗き込まれ、空は頷きながら座り直した。

「はあ……死ぬかと思った。よっしーは何ともなかったのか？」

「……まあな」

「えー何でうちだけ……」

また空が小さく咳をしたところに、円が慌てて駆け寄った。

「空、ごめんなさい。大丈夫？」

「死にかけた」

空は憤然と言って円の後ろで縮こまっている斑に目をやった。身をすくめていてもやはりかなりでかい。

「斑はちゃんと叱っておくから、今回は許して、ね？」

お願い、と両手を合わせて懇願する円を見て、空は盛大なため息を吐いた。

「叱るだけで早とちりが治るとは思わねえけどな……まあいいよ、今は怒る気力もない」

「ホント？　ありがとう」

円はホッと胸を撫で下ろし、改まって話し始めた。



「わたし、斑に連れて行ってもらつから、二人とはここでお別れるね」

「ああ、わかった」

空が頷くと、円は二カと無邪気に笑った。

「あと二人を家に招けるように、母上と話しておくね。いつになるかわからないけど……その時は遣いを寄越すから」

「いいのか？ まあ円の母親とは一度話したかったから、うちは有難いけど」

「うん、海に関してはわたしも気になるし……このことはまた会った時に話そう」

「お二人は何処まで参られる」

いつの間にか斑が円のすぐ側まで近寄ってきていて、空は驚き彼を見上げた。

「江戸だけど」

良明が平然と答え、斑は顎を撫でながらニッと口の端を上げた。

「江戸ならば四半刻もかからん、私が送ろう。さっきの詫びだ」

「四半刻って……どうやって？」

空は首を傾げた。良明の話だと、江戸まであと一日はかかるようだった。それを四半刻（約三十分）で行くとなると、どれだけの速さで進むのか想像もつかなかった。いや、まずどういう手段を使うのかすら分からない。

不思議そうに良明に目をやると、彼もこちらに顔を向け首を傾げた。すると斑が大声で笑う。

「案ずるな、そなた達はただ私の背に捕まっていればいい。荷をまとめてついてきて下され」

むくりと立ち上がった大男は、床板を踏み鳴らしながら外へ出ていく。彼を見送り、空と良明は同時に円へ振り返った。

「大丈夫なんだろうな、あれ」

「あーうん、危険ではないよ。速く移動できることは保証する。でもおすすめはしないかなーあはは」

ケラケラ笑ってから斑を追う円の背を見て、二人は毎度ながら脱力感を覚えた。そして目配せし合ってから、観念したように荷をまとめ始める。

「なーんかイヤな予感する」

「おれもだ。あの粗さを見てると……色々不安だ」

「でも四半刻で着くのは魅力的だよな」

「……ホントにそうだったらな」

二人は荷物片手に立ち上がり、堂の外へと向かった。

「よいか、絶対に手を放すでないぞ。男は女を支えてやれ」

「……………」

「あ、こら、毛は引つ張るでない」

「じゃあどこ掴めってんだよ！」

良明の後ろから顔を出し空は怒鳴った。二人は今、犬のような獣の姿になった斑の背にまたがっている。空と良明、それから円が乗ってもまだ数人は乗れそうな大きな獣だ。全体的に黒い毛並だが、左耳のところに白い毛が円状に点々と生えている。まさに斑模様。良明は一つため息を吐いて、空の両手を掴み自身の腰に回した。

「離すなよ」

「お、おう……」

突然のことで僅かにたじろぎながらも、空は彼の着物を握り締めた。

「では、行くぞ」

斑は地面を確かめるように数回足踏みし、前足を折って姿勢を低くした次の瞬間、天高く飛び上がった。身体を押さえ付けられるような余りの衝撃に、空は悲鳴を上げることさえできなかった。

目をきつく閉じて良明にしがみついていると、不意に彼が苦笑混じりに口を開いた。

「ここまでぶっ飛んだことされると笑いしか出ないな……空、見てみる」

「へ？」

目を開き、良明が指差す方へ視線を向けると、青々とした山並みと細くうねる山道、所々に立つ民家が非常に小さく見えた。そして遠くには紺碧の海。

「すげえ……って、高すぎだろ！」

真下を眺めた途端下腹を締め付けられる感覚に襲われ、思わず良明に身体を寄せた。良明は短く笑い、斑の背中をぽんぽんと叩いた。

「馬に乗ってる感覚と結構似てるな。でも馬より低いから安定してる」

「ふむ。人間を乗せるのは初めて故、比べられるのも初めてだな。だが馬も神聖な生き物だ、似ていてもおかしくない」

宙に着地し、そして宙を蹴りながら斑は答えた。人間に不可能な行動を彼ができるその原理は、空達にはこれから先もきつと分からない。

良明の背後から斑の頭を覗き見、空は尋ねる。

「斑は何の生き物なんだ？」

「生き物と言うか、私は狛犬だ」

「神社にある？」

「そうだ、円様のお家の番人である。いや番犬か」

そう言っただけは豪快に笑う。

「狛犬って普通対になってるものじゃねえの？」

良明が質問を継ぎ、斑の代わりに円が答える。

「もう一人いるよ。縞って言ってね、その子は母上に付いてるの。斑のお兄さんなんだよ」

縞（しま）という名前と斑の兄ということ踏まえ、二人はそれぞれ思うままに縞の想像をした。声にはしないが、考えたことは、大体一致している。たぶん身体のどこかに縞模様があるはずだ。すると急に円がクスクスと笑い出す。

「兄弟なのに、全然似てないの」

「うーむ、私は似てると思うんですがね」

少し拗ねたような声で斑が言い、円は更に笑った。

眼下の景色を眺め、時折会話をしながら四人は宙を進んだ。四半

刻もまだ経たない頃、斑が急に呟いた。

「もうすぐ江戸だ。少し手前でそなた達を下ろす」

前方には、大きな町並みが見えていた。

「あれが城？」

町のほぼ中央にある広い敷地を見ながら、空は良明の袖を引つ張った。

「ああ。久しぶりに見るな」

ぼつりと呟き、良明はため息を吐いた。

「戻るつもりはなかったけど……仕方ないか」

「？」

独り言を言う良明を背後から見上げ、空は首を傾げた。不意に、江戸が故郷だから寄ると彼が言っていたことを思い出し、視線を外して少し考えを巡らせる。江戸は寄るだけで、またそこに住み着く訳ではないようだ。多分、何か目的があるのだろう。

空はもう一度、良明に目を向けた。今思うと、彼も自身のことや考えは余り言葉にしない。良明が何を思って江戸の町を見つめているのか、空には分からない。しかしその表情からは、明るい思考をしている訳ではないことが、はっきりと見て取れた。陽気な良明の中にも暗い影は潜んでいる。

(……ちよっとくらい、話してくれてもいいのに)

少し口を尖らせ、空は良明の背中に頭を載せた。斑が口を開いたのはその時だった。

「よし、ここで下ろす」

「へ？」と空がポカンとした途端、斑がぐるりと一回転した。天地が逆になり、何も知らされていない空と良明は当然のごとく振り落とされる。

「へっ！？ ちよっ……」

斑の毛を掴もうと手を伸ばしたが、宙を切るだけだった。落ちていく二人に、斑が大声で告げる。

「着地は任せるぞー。では円様、お願い致します」

「はいはい」

揚揚と頷き、円は懐から乳白色の石を取り出し、両手で握り締めた。

「あまの守、あめつちの御空に、きよめの御風を吹きおこしたまえ」

円はそれだけを呟き、空達が地に到達するのさえ見届けずに、二人はそのまま風のように去っていった。

落下しながら、良明は彼等が消えるのを見ていた。円が石を取り

出したのも確認している。

(大丈夫そうだな)

落とすだけ落として何もしないということはないだろう。そう考えながら、瞼をきつく閉じて風圧に耐えている空に目をやった。斑に振り落とされた時、良明は咄嗟に彼女の腕を掴んでいた。

そういえば、初めて会った時も空は上から降ってきた。空という名前故に、彼女は天に好かれるのだろうか。

良明は短く笑い、腕を引き寄せて空の身体を肩に抱えた。下に目をやると、地面はすぐそこまで迫っている。

「空」

「はっ？ なっ、なに!？」

空が余りにもせっぱ詰まった声をしていたため、良明は更に笑い声を上げた。

「このまま死んだりしてな」

「ちよっ、それ洒落になってねえから……っ!」

未だ笑う良明を空は涙目で睨む。彼女の身体を抱え直し、良明は着地する体勢を取った。

「掴んでろよ」



言われるまでもなく、空は良明の着物を握り締めている。

地面まであと少し、となったところで不意に風の様子が変わった。急に身体が浮いたような感覚がしたが、それは落下の速さが落ちたからだ。二人の周りを温かで柔かい風が包んでいる。そのままゆっくりと下り続け、短い草の生える野原に良明は足を付けた。途端、空の重みが肩にのしかかる。

地面に下り立った空は、噛み締めるように土の感触を確かめ、そして盛大にため息を吐いた。

「だから嫌な予感がするって言ったんだ」

「随分高いところから落ちてきたな」

宙を仰ぎながら、良明は呟いた。空も顔を上に向けた。浅葱色が眩しく、目を細めて遠くまで眺めた。円達の姿は完全に見えなくなっていた。

「生きてたからよかったものを……斑……次会ったらただじゃおかねえ」

「同感だ」

良明は頷き、空を促して町の方へと歩き始めた。

宙を駆けながら、斑は背に乗る円に話しかけた。

「先程の、女の方は何やら危険なものを抱えていましたな。焔に似

ている気がしたのですが……彼女が乗っている間、背の毛が逆立っていました」

「そうだねえ……わたしの力じゃどうしようもなかったから、母上に相談しようと思ってるんだ」

「ええ、それが最善策でしょう。そういえば男の方も、普通に見えて面白い者でしたな」

「うん、良明もちよっと稀な体質かな。やり方は独特だったけど、術を解くなんて誰でもできるわけじゃないし。どこで教わったんだろっ」

円の声が弾んでいるのに気付き、斑は耳をぴくぴくと動かした。

「……円様、あの二人を気に入っただけですか？」

「うふふ、どうでしょう」

意味深な笑みを浮かべ、円は斑の頭を優しく撫でた。

江戸の町は人が多く、皆がいきいきと見えた。

すれ違う人の中には、道具を持って仕事に向かう者、魚を売って歩く者、それに腰に刀を二本差して歩く武士の姿もある。そして撫子色の着物を着た大店の娘らしき若い女が、従者を連れてにこやかに歩いて行く。その華やかな様子に空が見惚れていると、良明はいつの間にか大分先に進んでいた。

慌てて彼を追い、隣に並んでまた辺りを見渡す。落ち着きない彼

女を見下ろして良明は尋ねた。

「そんなに珍しいのか？」

「うちこんな人が多い町に入るのは初めてなんだ」

少し興奮しながら空が言った。

「それで、どこに行くんだ？ よっしーの家か？」

空が首を傾げると、良明は「いや」と軽く頭を振った。

「帰る場所はないんだ。知り合いのどこに行く」

「知り合いつて？」

「もう見えてる」

良明が前方を指差し、その先を追って空は視線を動かした。そこにある建物に思わず目を丸くする。

町中にも関わらずその一角を白壁の塀がぐるりと囲っており、異質な威厳を放っていた。表から見ただけではその敷地の広さは計り知れないが、それはかなりのものと思われた。よく見ると、広い門の横に松葉屋と書かれた大きな提灯がぶら下がっている。それがこの店の名なのだろう。余りの存在感に口があんぐりと開いてしまう。

「ここ何」

「旅籠屋。金があるやつとか……城のやつらも使う」

「へえー」

空は感心しながら良明について行き、彼の背中越しに門を見やった。同時に、群青色の袷に藍染めの前掛けを付けた少女が門から出てきた。そして手水桶から杓で店先に打ち水を始める。

「栞」

少女に近寄り良明が小さく声をかけると、彼女は手を休めて顔を上げる。良明の姿を捉えた途端、少女は瞠目した。

「……良明さん」

「どうも。董さんいるか」

「ま、待っててください。呼んできます」

桶も置いたまま、栞（しおり）は杓片手にバタバタと旅籠屋へ引き返していった。彼女を見送ってから、空は良明を見上げた。

「董さん？」

「ここで働いてる人だ。店主の次に偉い人」

「……女将みたいなものか」

「ああ」

良明が短く頷いた時、店の中から騒々しい足音が二つ聞こえ始めた。その足音は次第に近付き、すぐ藤紫の袷を着た女が表へ飛び出

してきた。

振り返った彼女の容姿に、空は目を見張った。

女将と聞いて想像していたのは、年のいった厳しそうな女だったが、出てきた彼女は予想よりはるかに若く、丁寧に化粧を施した目元も紅を引いた唇も凜としていた。花の香りがしそうな姿に、空は知らず知らずのため息を漏らす。

彼女は良明の姿を認めて、整った眉をつり上げた。その表情のまま良明に近寄るなり、右手を振り上げる。パシン、と妙に小気味いい音が鳴り響いた。

突然のことに空は呆気にとられてポカンと口を開いた。良明を殴った女は怒りの余り肩で息をしながら口を開く。

「……何やねん、そのしんきくさい面。わざわざ見せに来よったんか？ そらご苦労なこつちや。このドアホ」

「……董さん、くに訛り出ますよ」

叩かれた頬を擦り、良明は少し拗ねたように言った。

「やかましわ。アンタの面見て苛ついてんねや」

そう言って、董（すみれ）は叩いた方とは逆の頬を抓った。良明のしかめっ面を覗き込み、ため息を吐く。

「二年もふらふらしよって……まあええわ。部屋貸したるさかい、中入り。説教はそれからや」

「えー……いてて」

良明が不満そうな声を上げると、董は頬を抓る手に更に力を入れ

た。

「えーて何や、えーて。アンタらおらん間、どんだけ……ん？ 女の子がおるやないの、良明の連れ？」

良明の背後に立ちすくむ空に気付き、董が朗らかに笑う。

「良明が誰か連れてるなんて、珍しい」

唐突に訛りが消え、空は面食らった。空が僅かに頬を引き吊らせているのにも構わず、董は空の高さに合わせるように腰を折り、柔らかに話す。

「可愛いお嬢ちゃんね。お名前は？」

ニコニコと笑いかける董を見上げ、空も歪んだ笑みを浮かべる。

「空だけど……すっげーガキ扱いされた気分」

空の呟きに、頬を抓られたままの良明が吹き出す。董は怪訝に思い彼を睨んだ。

「何がおかしいのよ」

「いや、そいつ十六だよ」

良明の言葉に董は一瞬ポカンとし、そして笑い出した。

「こんな小さいのに十六とか聞いたこともないわ。それだと栞と同じ年じゃない、ねえ」

董が振り返り、背後に佇んでいた栞は頷いて良明へ怪訝そうに視線を投げる。

「良明さんの妹でしょう、年の離れた」

「いやちょっと待て、おれ妹がいるとか言ったことあるか？」

「あら、生き別れた妹を捜し回ってたとばかり」

うふふ、と口元を押さえて笑う栞を見て、良明はげんなりとする。

「何勝手に想像膨らませてんだよ。てかこんな妹こっちが願ひ下げだ」

「どつという意味だそれ！」

聞き捨てならんとばかりに空が怒鳴る。

「それにお前らも何で信じねえんだよ！　うち十六だったの！」

「嘘ね」

「うーん、大きく見てもせいぜい十二ぐらいじゃないの」

董と栞が次々と言い、「何で!？」と空は驚いた。この背丈のせいで幼く見られることはしよっちゅうだったが、年齢を言えば驚きはしても大体の人が理解してくれた。だが、この二人ははなから疑ってかかっている。こちらだって、好きで小さく生まれたんじゃない。

良明の頬を放し、堇はまた空に笑いかけた。

「空ちゃん、江戸は初めて？」

「え、うん」

急に話題が変わり、空は思わずたじろいだ。

「そう。それじゃあ町中見ておいでよ、堇に案内させるから」

「えー私ですかー？」

堇が面倒くさそうな顔をし、堇はやれやれと肩をすくめた。

「あんだ、今日は外に出る用があったでしょ。そのついでよ」

「いいですけどー、なら私、今日は暇もらいますからね」

「はいはい」

苦笑しながら堇が頷き、堇は「やった」と心底嬉しそうに万歳した。

「空ちゃん待ってて、ちょっと準備してくるわ」

空に満面の笑みを見せ、堇は喜々と前掛けを外し門をくぐっていき、彼女を見送り、空は傍らの良明を見上げた。

「よっしーは？」



「おれはいい。ずっと住んでたところだし、今更見て回るうとは思わない」

「それに今から説教が待ってるしね」

ニヤニヤと言う董に、良明は恨めしそうな視線を向ける。

その様子を見たことで自分が少し気落ちしているのに、空は気付かなかった。

二人の少女を見送り、良明は董に促されて松葉屋の門をくぐった。丁寧に手入れされた庭を横目に、玄関へと足を踏み入れる。忙しく働いているのか、広い玄関に使用人は一人もいなかった。ちらと下足棚に目をやると、数人分の下駄や草履があるだけで団体の客はいないことが窺える。使用人の多く他の仕事に出ているのだろう。そう考えながら框に腰を下ろし、水を張った桶で足を洗いつつ小さく尋ねる。

「董さん、何人ぐらいいた」

「せやなあ……三人ぐらいやるか」

くに訛りで董が答え、良明はギョツとした。

「そんなに？ 一人しかわからなかった……感覚鈍ってんのかな」

はあと短くため息を吐き立ち上がる良明を、董はケラケラ笑いながら見上げた。

「うちもアンタとしゃべっていると地が出てしゃあないわ。よし、ここからはちゃんとする」

一呼吸入れ、董は声を抑えた。

「あんたらがいなかった間、ここも大変だったのよ」

「……部屋入ってから聞く。こっちのことも全部話すから」

「そ、私の話は高いわよ。と言いたいとこだけど、そっちとこっちの話の質は同等そうね。一陽のことでもあるし」

廊下を歩きながら疲れたように肩をすくめる董から目をそらして、良明は僅かに目を伏せた。

「ごめん」

「謝るのは話を済ませてから。いい？ 話しの最中は謝罪抜きよ、煩わしいから」

「わかった……あ、そっぴやあいつら大丈夫か。三人もいたなら、一人ぐらいあっちに行きそうだけど」

「大丈夫でしょ」

そう言って、董は不安などみじんにも感じさせない笑顔を見せる。まるで母親のような、全てを包み込む笑顔だ。

「栞だって、立派な忍。女の子一人ぐらいなら守れるわよ。あんただって栞に投げ飛ばされたことあるでしょ」

「……記憶にない」

良明がつっけんどんに言い、董は呆れてため息を吐いた。

「はあー、男はこれだから。都合悪いとそうやってごまかして」

「……凜は？」

唐突に話を変える良明に、董は不満そうな視線を向ける。

「いるわよ。あんたのこと、覚えてるかわからないけど」

「えー、あんなにかわいがってやったのに？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5933z/>

---

十六夜の月

2011年12月24日01時48分発行